
君の見るセカイ ~ Endless The World ~

ごまふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の見るセカイ ｝ E n d l e s s T h e W o r l d ｝

【Nコード】

N 6 8 8 8 K

【作者名】

ごまふ

【あらすじ】

昔より魔法使いと呼ばれる異能者たちとゴーストと呼ばれる化物の戦いが終わることなく続いていた。

永遠に続くかと思われた戦い、そしてこの世界。

一人の少女と二人の少年の運命が交錯したとき、終焉への火ぶたが切って落とされたのだった。

これはその運命に縛られた者たちの過酷で残酷な、そして悲しき物語。

第一章 プロローグ（前書き）

このお話は以前違う場所で少し描いたものをリメイクしたものとなっています。

もしかしたら知った名前や内容だと気づく人もいるかもしれないですが、ご勘弁を！

第一章 プロローグ

俺は毎日のように悪夢を見る。夢の中で俺はある少女を殺すという目的のために化け物と戦っている。

そして少女目前というところである青年に阻まれ、決着つくことなく夢が終わる。俺はある時から、この夢は何かを暗示している予知夢ではないかと思うようになった。俺の悪夢は少女と青年を倒さない限り終わらないのだ。

俺の目の前には不気味なくらい赤く光る夕日。

しかし俺の視界に映っているのはそれではなく、二人の人間の姿だった。

「終わりか……始まりか……」

決着があるとして、その先が何なのか。

それは終わってみなければわからない。

「行くか……」

俺は今の俺に終わりを告げるためにその場を後にした。

第一章 出会いそして過去？

世界中の至る所で発生している化け物。

ゴーストと呼ばれるその化け物は、ある程度の種類が存在するもののすべてが名の通り死者が復活し、変異したものである。

ゴーストが世界中に現れるのと同時に、人々の中に特殊な力を持つ者が現れ始める。

エクソシストや陰陽師、サイキッカーなど様々な呼び名で呼ばれてきたが21世紀に入ると同時に魔法使いという名称にまとめられた。

世界中で確認されたゴーストと魔法使いだが、どういうわけか日本にその存在が集中していることがわかった。そのこともあり、魔法使いをまとめる秘密組織は日本に聖十字学園を設立した。

この学園には魔法使いの育成と、ゴーストとの戦いのために魔法使いを集めておくという目的もあった。

聖十字学園は初等部から高等部までありエスカレーター式となっている。

入学資格は能力者であることというだけで、資格さえあれば途中入学も可能だ。しかし一度入学すると特別なことがない限り学園の監視下に置かれ、退学は認められない。その代わり基本的な生活は保証される。

学園の存在は一般人には秘密裏とされ、表向きには国立の一貫校とされている。

聖十字学園は普通の学園とは比べものにならないくらい大きいのだが、どういうわけか食堂は一つしか存在しない。

1000人を収納できる巨大な食堂ではあるが、在校生の数が5

000人を超えるためお昼にもなると食堂はまさに戦場と化す。

「わあ！わああ！」

どうにか目当てのパンを手に入れようと紛争するが、歯が立たなかった。元々小柄な体型である上に、結槻^{ゆいつき}ゆのが属する中等部二年生の教室は食堂から遠いという不利さもあった。

「うう……」

どうにか手に出来たあんパンを片手に屋上にたどり着いたはいいが、その時点でフラフラとなっていた。

「今日もこっぴどくやられたみたいだな」

「あ、神威さん」

屋上でゆのが来るのを待っていた草薙^{くさなぎ}神威はボロボロなっただゆの姿を見て呆れた。

「ゆののところは金持ちなんだろう？メイドにでも弁当作ってもらえよ」

神威はゆのに牛乳を渡した。ゆのは頬を膨らませながらそれを受け取った。

「ここの食堂で売ってる食べ物は何れも超有名店の料理人が作ってるんですよ。食べなきゃ損じゃないですかっ」

ゆのの言う通り、食堂メニューの人気は高く、それ目当てで学園に来ているような奴もいる。特に週1で発売されるスイーツは絶品という噂だ。ちなみにゆのはこの学園に来て2年経つが未だに食べることが出来ずにいる。

いずれは食べてやるっ。と心に思いながらゆのは牛乳を一口、口に含んだ。

「うう、マズいです」

「嫌いなら飲まなきゃいいだろ？」

神威の言うことはもつともだが、ゆのは自分の発育が遅いことを気にしており、牛乳はその現れとも言えた。

「好き嫌いしてたら大きくならないです」

神威は苦笑いを浮かべた。神威は前にも同じような質問をし、同

じような答えをもらった。

ゆのは子供のような体型にコンプレックスを抱いているようだった。モテないのはそのせいだと思っっているらしいが、実際のところそれは勘違いで、神威のクラスにもゆののことを気にかけている者が居るくらいで、中等部女子の中では五本指に入る美少女らしい。

ゆのの話を聞く限りでは告白らしいこともされているようだが、どのように思ったらそうなるのか、ゆのはそれを告白だと感じたことは無いらしい。

（鈍いのか、わざとなのか……どっちなんだか）

一緒に居る限りでは、お世辞にも賢い子には見えない。わざとじゃないなら、何かに操られているのか？と疑いたくなってしまう。

「ここで会ったんですね」

ゆのが突然そんなことを言い出した。

神威はその言葉の意味が一週間前の放課後のことを指しているのだと、すぐに理解できた。

一週間前。

神威とゆのが出会い、運命を感じ合ったあの日の話――。

第一章 出会いそして過去？（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
物語の進行についてですが、

第一章プロローグ～第一章本編～第一章エピローグ～第二章プロ
ーグ～以下略

という形で進めていきたいと思います。

第一章ばっかなのは間違えではないですのでご了承を（笑）

第一章 出会いそして過去？

神威には放課後になると屋上に出向く習慣があった。

理由らしい理由はないが、強いて言うならば行かなければならないと感ずることがある——というところだろうか。

神威が所属する高等部の校舎は他の初等部、中等部と比べると高さもあり大きいという特徴を持っている。

そのため景色を見るには最適で、カップルが意外と多かつたりする。

しかし今日はどういうわけだか誰も居なかった。

珍しい日もあるものだと思い、屋上に一步踏み出す。

「——さん」

と、左のほうから声が聞こえた。居ないと思っていたがどうやら先着が居たようだ。

相手は小柄な女の子だった。

女の子はフェンス越しに夕焼けに染まる空を眺めていた。

（あれは……）

神威はその女の子を知っていた。

（確か結槻ゆの……だったか？）

友人が可愛い子がいるんだとか言っけて見せてくれた写真（盗撮）に写っていた。

写真で見た屈託のない笑顔からはこのような所で黄昏る理由など無さそうに見えた。

（あ……？）

神威はゆのがお母さん、お父さんなどとブツブツと何かを呟いているのを聞いた。そして——。

「泣いてる……のか？」

神威の口から思わず言葉が漏れていた。

「！？」

ゆのは驚いて神威のほうを振り向いた。そして確かに顔には涙が流れた後があつた。

「な、泣いてなんかいいですっ」

ゆのはそう言いながら目をこすった。

「別に聞いちゃいけないよ——まあでも」

神威は肩をすくめながら言つた。

「何か辛いことでもあつたのか？」

神威の言葉を聞いた途端、ゆのは涙をボロボロ流し始めた。

おそらく今まで誰にも弱い自分を見せたことが無かつたのだろう。事故とはいえ、泣いているところを見られ、初めて他人に傷を触れてもらったことが、ゆのの我慢の限界を越えさせたのかもしれない。神威は再び肩をすくめ、苦笑混じりにフェンスに寄りかかつて座つた。そしてゆのが泣きやむのを待つことにした。

しばらくしてゆのは落ち着いたので、深呼吸をして神威の隣に腰掛けた。

「今日はお母さんとお父さんの命日なんです」

「!？」

思わぬ言葉に神威は息を飲んだ。

（若くして天涯孤独の身つてことか……）

まだ14歳くらいの女の子が両親ともに無くすことの不安といつたら言葉になど出来ないだろう。

「だからついつい思い出しちゃうんです。お母さんとお父さんのこと。そしてあの日に起こったことも——」

ゆのが語り出したあの日。それは神威の想像を遙かに越えていた。

第一章 出会いそして過去？

ゆのの家はちよつとした有名な資産家であつた。

また、両親共名の通つた魔法使いでもあつた。

ゆのはそんな両親の間に生まれた一人娘で、超がつくほど可愛がられた。

両親のあまり余るほどの愛情を受けながらも、ゆのはワガママな、いわゆる典型的なお嬢様——という風に育つことは無かつた。

両親が魔法使いであることを知つたのはゆのが8歳の頃だつた。

魔法という夢溢れる存在にゆのは憧れ、そしてゆのも両親同様に魔法使いになりたいと願うようになった。

しかしゆのは魔法使いとしての才は無く、極めて普通の子でしかなかった。

ゆのはそのことに落胆していたが、普通に幸せになつて欲しいと思つていた両親は、才のないことが逆に良かったと感じていた。それもあつてか両親は魔法のことをあまりゆのに話すことをしなかつた。

「ねえねえ、橘さん。なんでゆのは魔法使えないのかなあ？」

ゆのは布団の上に座り、枕を抱きながらゆのの部屋を掃除している、橘縁に話しかけた。
たちはなゆかり

橘は掃除の手を止めることなく、

「ゆのお嬢様は普通の子としてお生まれになつた。ただそれだけのことですよ」

そう答えた。

ゆのは頬を膨らませながら枕をバンバン叩いた。

「普通なんてイヤ！魔法使いになつてお空飛んでみたい！」

橘は掃除の手を止め、ゆのの方に体を向けた。

「普通ほど幸せなことはありませんよ。それにゆのお嬢様が思っているほど魔法使いも良いものではありませんよ」

ため息まじりにそう言つとぶー文句を言つゆのを無視して再び掃除を始めた。

そうして魔法への憧れをそのままにゆのは10歳を迎えた。

ゆのはこの頃から自分にしか聞こえない声が聞こえるようになった。

初めは雑音にしか聞こえなかったが、次第に何かの言葉を言っているのだということがわかってきた。

そしてこの現象が宿命への一歩となる。

声は何を言っているのかも未だわからないまま、1ヶ月が経った。ゆのは学校の友達の家から自分の家に帰る途中だった。門限は6時までとされており、守らなければ親に代わって橘に怒られてしまう。

6時までではもう30分をきっていた。ゆのは怒った橘を想像し、体を震わせた。

今日のように間に合わないそんな時は裏道を使う。

人通りも少なく、夜になると電灯もないため真っ暗になってしまふ。そのため両親からは通らないように言われていた。

だがゆのは門限を破って怒られるよりはマシだと、黙って裏道を使っていた。

（おかしいなあー）

何度も使っている道だ。道の構造もどれくらいかかるのかもわかる。

だからこそ変とを感じる。何かおかしいと。

そう思つた瞬間ゆのの真横を風が走つた。

そして視線の先にあった空箱を弾き飛ばした。

「きゃああ!？」

ゆのは衝撃で尻餅をついてしまった。

わけもわからずどうすればいいか迷っていると、

『ドウッ』

と鈍い音が聞こえた。

「危ないにゃ！」

「え！？きゃっ」

何か柔らかい物にゆのは吹き飛ばされた。

さっきまでゆのがいた場所のコンクリートが木っ端みじんに弾けた。

「大丈夫かにゃ！？」

「え……ネコさん？」

ゆのの前に居たのは白い猫だった。

不思議なことにその猫は言葉を話し、しかも二本足で立っている。

『ドウ、ドウ』

再び鈍い音が聞こえた。

さすがのゆのもこの音が何かしらの攻撃の発射音であることに気付く。

「にゃにゃ！」

白い猫はゆのの前に立ち、ピンク色の肉球をかかげた。すると白い猫の周りに光り輝く壁が現れ、その壁により敵の攻撃は防がれた。

「一体何が……」

一旦は白い猫のおかげで助かった。

だが自分がねらわれているという事実が変わらなかった。

「うつうつ……」

急に怖くなり、ゆのは我慢できずに泣いた。

「怖いのはわかるにゃ。ゆのはまだ子供だし。でも今頑張らないと明日はないんだにゃ！」

「で、でもどうしたらいいの？」

「ゆのには魔法があるじゃにゃいか」

「ゆのは魔法なんて使えないよ！」

今まで一度として魔法など使えたことは無かった。

きつと自分には素質なんてないんだと最近では思い始めてすらいた。
「そんなことないにや。今まではまだその時期じゃ無かった、それだけのことにや」

ゆのには猫の言っていることがまるで理解できなかった。
バキバキ……。

まるで氷を踏んだときになるような不自然な音がした。

「な、なに？」

「もう結界がもたないにや……」

ゆのは猫の言葉を聞き、張られた結界に視線をむけた。
結界はガラスのようにひびがはいつていた。

こうしてゆのが葛藤している合間にも敵は攻撃を加え、ジリジリとゆの達を追いつめているのだ。

『ドゥ』

その音と共に攻撃が放たれる。

そしてその攻撃が壊れかけの結界を粉々に砕いた。

「しまったにや！」

猫の声とほぼ同時に敵の攻撃音がした。

今度こそ自分に当たるんだな、とゆのはぼんやり思った。
だが……。

「……！！？」

ゆのの目の前で宙に舞っていたのは猫だった。

ゆのは猫が自分の身代わりになったのだと、すぐ理解できた。

「猫さん……！」

地面に叩きつけられ、傷だらけとなった猫をゆのは抱きかかえた。

「ゆのは……こんなところで死んじゃダメな子なのにな……」

猫はそう言っただけで気を失った。

このままでは猫は死んでしまうだろう。

（どうしたらいいの……猫さんを助けたいのに、ゆのじゃ何も……）
猫を抱きしめゆのは涙を流した。
どうしようもできない自分が悔しかった。

『——じて』

(え?)

『私を……自信じて。そして今あなたの思いを強く願って!』
どこからともなく女性の声がした。それは初めて聞く声なのに、
前から知っているような、とても近い存在のように感じた。

ゆのはその声の言葉を信じるしかなかった。そして願うしかなかった。

「お願い!猫さんを助けて!!」

ゆのの言葉と共に、ゆのの周囲に凄まじい魔力が発生した。
流れ出した魔力は意志を持っているかのようにゆのたちを覆った。
バーン!!

ゆのを覆う魔力に敵の攻撃が当たり、攻撃を弾き飛ばした。

「こ、これって?」

結界だった。

そして見る人が見れば、猫が作ったそれとは比べものにならない
力のものだと気づくだろう。

「ほう……確かにこれはすげえ」

暗闇の向こう——敵が初めて言葉を発した。

「だが結果は同じ事さ」

敵は先ほどよりも多く攻撃を放ってきた。

だが攻撃はすべて結界によって弾かれてしまう。それでも敵は攻
撃をやめなかった。

ゆのにはその理由がわからなかったが、知識のある魔法使いなら
きわめて単純な答えがあった。

ありとあらゆるモノに永遠はない。それは魔法とて同じ。

ゆえに結界もいずれ壊れる。どんなに強力であろうと。

魔法は生命エネルギーの具現化されたものだ。

生命エネルギーと大気中に存在する不可視のエネルギーとを掛け
合わせるにより、より大きなエネルギーとする。

これは魔法使いとして基本中の基本。

だがゆのはそのことを知らない。

今張られている結界はゆのの生命エネルギーだけで構築されており、力は強大でもその耐久性は低い。

繰り返される攻撃。

ゆのまで届くことはなく、ゆのに傷を負わせることなど出来ないはずなのに――。

「はあ、はあ」

みるみる体力は削られていった。先ほどまで眩しいほどの輝きを放っていた結界は鈍く光り、ゆらゆらと揺らいでいた。

（どうして？このままじゃ……）

もはや限界だった。

視界は揺らぎ、もう数回攻撃を受ければ気を失ってしまう。

（やっぱりゆのなんかじゃ誰も守れないんだ……）

ゆのの意識は次第に途切れていった。

途切れていく中で、ゆのは少年の姿を見た気がした。

第一章 出会いそして過去？

ゆのが目を覚ましたのは自分のベッドの上だった。

目を覚ますと視界の先には笑顔で喜ぶ橘の顔が映った。

「橘さん……？」

「良かった……無事で何よりです

」 橘の喜ぶ顔を見てゆのは余計に状況がわからなくなった。
なぜ今ここにいいのか理解できなかったからだ。

「生きてる……？」

体は重いがしつかりと動いている。

どういうわけか自分は助かった——その自覚がわいてきた。

「ゆのはどうしてここにいるの？」

「お嬢様の帰りが遅いと心配なさったお父上様が聖十字学園の方に
掛け合つて、お嬢様を捜して頂いていたのです。そうしたら、聖十
字の方からお嬢様が裏路地で倒れているとの報告を受けて、家まで
運んで頂いたのですよ」

「そうだったんだ……。他には誰か居なかった？」

ゆのは気を失う直前に見た少年のことが気になっていた。

「いえ、お嬢様以外は誰も……お嬢様を襲ったと思われる犯人もま
だ……」

「そっか……」

やはり幻だったのだろうか。

しかし何だか漠然としない奇妙な感覚がゆのを支配していた。

「とりあえず今日はゆっくりお休みください」

ゆのは橘にそう言われて素直に頷いた。

橘が部屋から出た後、ゆのは一人布団の中で少年のことを考えて
いた。

襲われてからひと月ほど経った日のことだった。

ゆのの住む家はいつになく静かだった。

一年に一回、ゆのの父親はお手伝いさん全員に休暇と、いわゆるお小遣いを与えるようにしている。

たまには自分達だけでやらなくてはいけない、という父親の考えもある。そのため今日だけはゆのと両親の三人しか居ないのだ。

「何だか妙な感じだにやあ」

「タマちゃんは初めてだもんね。でも確かに変な感じだよね」

ゆのは白い猫——自称タマにそう答えた。

タマは使い魔と呼ばれる召還獣に含まれる生物のようだ。

人語を話せるのも珍しくないらしい。

しかしゆのは何となくタマが魔法生物と言うにはどこか違うなと思っていた。

それにタマはなぜゆののもとに来たのか教えてはくれなかった。何はともあれ、ゆのを助けてくれたこともあり、両親や橘からは快く迎えられた。

ゆの自身も一人っ子のためもあってか、タマのことを気に入っていた。

「今日はお母さんもお父さんもいる日だから嬉しいな」

両親ともに忙しいために二人そろうことなど滅多にない。しかも今日は久しぶりに母親が手作りの料理を作ってくれるとのことだった。

「~~~~」

ゆのはこんな調子で一日中浮かれていた。

夕飯を食べ、食後は親子で夜遅くまで話をした。

お開きになったのはゆのが寝てからのことだった。

両親はゆのの寝顔を見て、明日もきっと良いことがある、とそう思った。

ゆのが襲われたことが前触れということ、そして明日などもう永

遠に來ないことなど知らずに……。

ゆのは何かに揺さぶられ目を覚ました。

（寝ちゃったんだ……）

起きて最初に思ったのは、もっと両親と話がしたかったなあという事だった。

それから自分が誰かに起こされたのだということに意識を向けた。

「やっと起きたにや！」

「タマちゃん？」

ゆのを起こしたのはタマだった。

どこか焦っているように見える。

「どうしたの？ おトイレひとりじゃいけないの？」

「それはゆのだにや！ ってそんなことどうでもいいにや！」

「何慌ててるの？」

「敵に囲まれてるにや！ 早く逃げるんだにや！」

タマの言っていることが一瞬理解できなかった。

「ゴーストの気配だらけにや！ もうしばらくしないうちにきつと攻め込んでくるにや！」

「え？ ええ？」

目を覚まして早々に言われても理解できるはずもない。

いきなりバンジー台に立たされ、飛べと言われているようなものだ。

「ゆの！ 無事か？」

「お父さん？」

父親は片手に剣を持っていた。

ゆのが産まれる前にある大きな戦いで使ったきりだと前に話していたのを聞いたことがある。

「ここは危ない。逃げるんだ」

「意味がわからないよ。お母さんは？」

「お母さんはこの屋敷に結界を張って時間稼ぎをしている。それもいつまでも保つかかわらないんだ。だからその前にゆのは逃げる」
だんだんとタマが言っていた敵の意味が頭の中で明確なものとなる。

（ゆのを襲った敵？）

心当たりがあるとしたらそれしか無かった。

ゆのが生きているという事は、前回敵は失敗してゆのを殺し損ねた。

そして今、人が出払っているこの時を狙い、やってきた。

そう考えるのが自然だった。

「私と妻で時間を稼ぐ。ゆののことを頼めるか？」

父親はタマにそう言った。

「任せて欲しいにや！必ずゆのを安全な場所まで逃がすにや」

父親は笑みを浮かべて頷いた。

「この子の言うことをよく聞いて行くんだぞ」

ゆのの頭の上に手を軽く添え、いつものように優しく言った。

「やだよ！お父さんもお母さんも一緒に行こうよう！」

「大丈夫だ。私もお母さんも後から行く」

「本当に？」

「ああ。お父さんが嘘をついたことがあるか？それにお父さんは昔、もつと敵がいっぱいいる中で戦ったことがある。これくらい平気さ」
父親の表情はこのような状況でもいつもの父親のままであった。

ゆのはそれを見てなぜか安心できた。

「二階の奥に隠し部屋への入り口がある。そこに隠れてくれれば安全なはずだ」

父親は急ぎでメモを書き、それをタマに渡した。

「頼んだよ」

父親は二人を見送り、見えなくなるとため息をついた。

「運命——か。やはりゆのはあれと出会う運命だったんだな。ま

「つたく、君の予言は外れたことがないな……マリア」
誰に言うでもなく、1人呟いた。

「予言が正しければ、私たちは死ぬのだな……」
そう言い残し、ゆのの部屋を後にした。

第一章 出会いそして過去？

タマはゆのの父親に渡されたメモ通りに二階の奥に向かった。

着いた先は当然いつも見ている屋敷の二階奥であり、隠し部屋など無かった。

「何にもないよ？」

ゆのは壁をペタペタ触ったり、忍者屋敷みたいに回転するのかもしれない、押してみたりするが何も反応は無かった。

「メモに魔力による開放つてあるにや。たぶん魔力を注ぎ込むと反応するんだにや」

タマは壁に前足を当て、魔力を少し流した。

すると壁に光が走り、光は2メートルくらいの長方形を作りだし、その長方形と同じ形に壁が消えた。

「すごい。こんなのあるなんて知らなかった……」

ゆのとタマは隠し部屋に一步を踏み込んだ。すると開いた壁は勝手に長方形部分を埋め、もとの壁に戻った。

「これなら敵にバレないにゆね」

ゆのとタマは階段を下る。階段にはランプがついており、意外と明るかった。

3分ほど下ると、さほど大きくはない部屋にたどり着いた。

部屋にはぎっしりと本が積まれており、真ん中に置かれた机にも本が山積みになされていた。冷蔵庫もあり、中には飲み物がこれでもかと言うほど入っていた。

「こっちの箱には簡単に食べられるものが入ってるにや。ここに長くいることを前提にしてたんだろうにやー」

ゆのは机の上のノートを開いた。何が書いてあるかはわからないが、筆跡が父親のものであった。

「お父さん……」

「ゆののお父さんは、ここで魔法の研究をしていたみたいだにやー」

タマは引き出しにあった日記を見てそういった。

「研究？」

タマは頷いて日記の一部を読み出した。

『魔法という不可視な存在がこの世に存在しているのだから、奇妙な現象を今更不思議がるのはおかしい話なのかも知れない。だがそれでも私はマリアの予言が現実起こり得るのかも知れないと、我が子の誕生で痛感させられた』

我が子というのはゆののことだろう。マリアと言う名を聞くのは初めてだった。

『ゆのと名付けた我が子は、産まれながらに私たちを凌駕する魔力を秘めていた。しかもマテリアルメビウスまでも発現させていたのだ』

「マテリアルメビウス？」

ゆのが聞き覚えの無い言葉に首を傾げていると、タマは日記からゆのに視線をうつして答えた。

「魔法使いは、大抵の人はマテリアルという道具を持っているにや。マテリアルは魔力を引き出し、より強力な魔法を使えるようにするにや。マテリアルは人による創造物に対し、マテリアルメビウスは無から生まれた有的存在と呼ばれる、自然発生した物体なのにや。」

一説では亡くなった使用者を求めてそれ自体も転生しているだとか、同じ世界、同じ未来を繰り返し回り続けているだとか、とにかく謎に包まれているんだにや。ただ言えることは、マテリアルメビウスを使える者はただ者じゃないってことだにや」

そのマテリアルメビウスをゆのは発現させた。

魔法がまともに使えない自分にそんなすごい物が発現出来たとはとても思えなかった。

『発現したマテリアルメビウスは過去の文献から、創世の書と呼ばれる物であることがわかった。どのような力を秘めているかはわからないが、このマテリアルメビウスを所有した者は過酷な運命に晒されるらしい。文献から読みとれる限りでは何かのキーツールであ

り、それをねらう者が後を絶たないという。この文献を作った時代の所有者も略奪にあい殺されたようだ』

タマはさらに日記を読み進める。

ゆのはそれをこわばった表情で聞いていた。

『調べ始めてもうすぐ10年になる。依然として創世の書の詳細は知れず、学園の知り合いにも調査を依頼しているが、それも今のところ成果はない。もしもこのマテリアルメビウスによってゆのの運命が悲しいものになると決定されているのなら、私たちはそれを避けられないのかと調査してきた。しかし今のままではその運命は避けられそうにない。私たちは今この状況に絶望感さえ覚えた。だが幸いにもゆのは今は魔法とは関係のないところで、幸せに過ごしている。それが私たちにとって唯一の救いとなっている。もしかしたら私たちが本当にすべき事はゆのが運命の日を迎えるまでに幸せな思い出を作ってやる事なのかもしれない』

その日記が書かれたのは一昨日だった。

ゆのは日記に記された父親の思いを知り、ふと寝る前にした会話を思い出した。

「ゆのは夢はあるのか？」

父親は母親の膝の上でケーキを食べているゆのに突然そうきいた。

「魔法使い！」

予想していたとおりの答えに父親も母親も苦笑した。

「他にはないの？」

母親がそう聞くとゆのはうーんと少し考えて答えた。

「お嫁さん、かな？」

思わぬ答えに二人は目を丸くした。

「お父さんみたいな人と結婚して、お母さんみたいに幸せになるの。それもいいかなあって」

「結婚か……父さんはなんか複雑だなあ」

父親がそう言くと母親が笑った。

ゆのも笑って、

「人を好きになるって、ゆのにはよくわからないから、まだまだ先の話だよ」

と、父親の肩を叩いた。

父親はまいったなあと、言いながら、しかし表情はどこか満足げだった。

ゆのは今そんな父親を思い出し、自分が何気なく言った普通の夢に安堵と幸せを感じていた——そう思った。

第一章 出会いそして過去？

隠し部屋についてから30分ほど経っていた。

タマは父親の日記をずっと読んでおり、ゆのは1人椅子に座って両親が来るのを待っていた。

この部屋はそういう構造なのか、それとも魔法の力なのか、まったく言っていないほど外界の音が響いてこなかった。

（大丈夫かな……大丈夫だよな……）

ゆのがそう思ったのと同じくらいだった。

どこからか大きな爆発音が鳴り響いた。

「な、なに!？」

思わず立ち上がった意味もなく周りを見渡した。

部屋に損害は無いようだが、確実に外界では大きなことが起きているのだ。

「大変だにや……」

日記を読んでいたはずのタマが青ざめながら呆然と立っていた。

「ど、どうしたの？」

「この部屋は強力な結界によってまったく別の次元に位置する特別な空間——みたいになっっているんだにや。にやから外からも中からも干渉することは出来ないのにや。でも今確かに外の音が聞こえ、多数の魔力も感じられるにや……つまり——」

「つまり……？」

タマが何を言わんとしているのかゆのは何となく悟っていた。

だがそれは決して受け入れたくは無い。出来ればタマの口からそれが出なければいいと思った。だが……。

「術者が死んだ可能性が高いにや……」

タマの言葉にゆのは絶望した。しかしすぐに行かなくてはという気持ちに背中を押された。

「ど、どこ行く気かにや!」

「助けに行かなくちゃ!!」

「無理だにや! ゆのが行つたつてどうにもならないにや!」

「そんなのわか——」

突然二人に凄まじいほどの悪寒が走った。

魔力をまともに感知することすら出来ないゆのでもその魔力の持ち主がただ者ではないとわかった。

「今の……つて?」

初めて味わう魔力による圧力にゆのは押しつぶされそうになった。タマも顔を青ざめさせていた。

「知ってるにや……」

「え?」

「この魔力……あの時にも感じたにや」

ブツブツと呟くタマをゆのは抱きかかえた。

「何を知ってるの?」

「この魔力は奴だにや……。ゆの、今絶対外に出ちゃだめだにや。魔力も使っちゃいけない。なるべく話さず、気配も消すんだにや……」

……

「ど、どうしちゃったの? タマちゃん」

タマはゆのにしがみついて真剣な眼差しで言った。

「そうでもないよ、あのサイレントストーカーに気付かれるにや! アイツはゆのを狙つて、きつと今探してるにや!」

「サイレント……ストーカー?」

その名を聞いただけでなぜか身が震えた。

「目的はわからないにや。ただゆのを狙っていることだけはわかる。とにかく今は身を潜めるのにや……」

「そんなっ! だって今外にはお父さんもお母さんもいるんだよ!!」

「諦めるにや……相手が、悪すぎたにや」

タマが絞り出した言葉はゆのをくじけさせるには充分すぎた。

ゆのはその場に崩れ落ち、ただ、ただ泣いた。

もう顔を見ることが出来ないであろう両親と、無力な自分に対し

て……。

日が変わり、3月3日になっていた。

くしくもこの日はゆのの誕生日であった。

第一章 出会いそして過去？

「朝になって、隠し部屋から出たんです。出てからすぐくびっくりしました。だって家がボロボロに壊れていたんですから」

うつむきながらゆのはそう言った。

「そのあと聖十字学園の人たちが手伝いに来て、お父さんとお母さんを探してくれました。でも見つかりませんでした。聖十字学園の人からはたぶん生きてはいないだろうって……」

またゆのは涙を流した。話をしている最中に何度も思い出しては涙を流していた。

「しばらくはほんとに落ち込んで、泣いて……。学校も行けなくてもね、私は全部無くした訳じゃなかったんだ」

ゆのは涙を拭って笑顔を作った。

「橘さんも、お手伝いさんのみんなも、タマちゃんも、みんな私のことを励ましてくれた。だから時間はかかったけど立ち上がる事が出来たんです。それで強くなるうって思うことも出来たんですよ」

それから聖十字への転入が決まり、今にいたるという。

ゆのはどこにでもいそうな普通の女の子だ。

だが過酷な過去を背負っているにも関わらず、その悲惨さを感じさせない。それどころか、どこか人を惹きつける輝きがあった。

それは強さなのだろう。

ゆのが手に入れた力なのだと思う。

「お父さんもお母さんも今は居ないけど、思い出もあるし。それにお母さんから貰ったこの指輪をつけていると近くで見守られているような気がするんです」

ゆのは人差し指につけた、古ぼけた指輪を夕日にかざした。

神威はその指輪を見て絶句した。

「それは！？」

神威は思わずゆのの手を掴んでしまった。

「な、なんですか!？」

ゆのはいきなりのことにあたふたし、握られた手をどうしたらいいのか悩んでいた。

神威はそんなのお構いなしに、ゆの指輪をまじまじと見た。

「やはり……っていうかなんで気付かなかったんだ？」

神威は1人毒づきながらゆのの手をはなした。

「どうしたんですか？」

「うむ、実はな……」

神威は自分の小指にはめられた指輪をゆのに見せた。

「あれ?これって……」

ゆのが持つている指輪とまったく同じだった。

「ぐう、ぜん??」

ゆのは目を丸くして神威のことを見た。神威は首を横に振って指輪を外した。

「ここ見てくれるか？」

指輪の裏側。そこには文字が刻まれていた。

文字は長い年月の間にだいぶすり減ってしまい、所々欠けていた。

「Dear・YUNO……?って、ええ!？」

なんとか読み取れた文字はゆの名を記していた。ゆのは自分の指輪を外し、同じように裏側を見た。

「おんなじだ……」

まったく同じ文字が刻まれていた。

偶然にして出来すぎている。

これはもはや必然というほかなかった。

「ど、どうして神威さんがこの指輪を!？」

「実は、わからないんだ。俺も知らないうちに持っていた。だが……」

神威は笑みを浮かべた。

「運命というものがあるなら、まさにこれがそうなのかもな。俺た

ちは会おうべくして会ったんだ」

普通の人なら恥ずかしくて口にも出せないようなことを、神威は平気で口にした。

ゆのもなぜか嫌な気はせず、今起きている必然にどこか納得していた。

これが二人の決して忘れることの出来ない出会いだった。

「なんだろうな……あの時ゆのの話を聞いてて、ゆののこと護らなくちゃって思ってたんだよな」

出会った日のことを思い返しつつ、神威はそう言った。

「そうなんですか？」

ゆのは少し残った牛乳を飲みながら神威を見た。

「話の中でゆのは確実に誰かに狙われてるってわかったし、話を聞いた以上放っておけないなって思いもあった。でもその時点じゃそういう気持ち的な思いでしかなかったんだよな。でも指輪を見て、そこで俺はこれが運命なんだって感じたんだ。俺はゆのを護るために生まれてきたんだって」

「恥ずかしいですよぉ」

「まっ、俺の勝手な妄想なのかもしれないけどな。それにあくまでゆのが迷惑じゃなければって話だよ」

ゆのは牛乳を口からはなし、笑顔を作った。それは出会いの日に見たものより、もっと近い者にみせる親しみの笑顔だった。

「そんなこと無いです。だって神威さんは私の特別な友達何ですか」

「特別？」

「そうです。私の心の傷に気付いてくれて、手をさしのべてくれた特別な人です」

ゆのは自分の過去を話した後、話してホッとした——と言って

いた。

ゆのは今こうして自分を知った上で一緒に居てくれる人を探していたのかもしれない。

神威はいきなりゆのの頭をかき回すように撫でた。

「わっ！？なんですかっ？」

「まっこれからもよろしくってことだ」

神威は照れ隠しなのかゆののことは見ずにそう言った。

ゆのはそんな神威を見て、

「こちらこそっ」

と微笑んだ。

第一章 出会いそして過去？

その日の放課後、ゆのは神威と一緒に帰ろうと、神威のクラスにきていた。

「ああ悪い。今日はクラス委員の仕事があるんだ」

神威はメガネを掛けていて、かつ服装自由の中で学園の制服をしつかり着ている。その姿から、真面目のレッテルを貼られ、あげくにクラス委員もやらされていた。

「まあ大したことはしないんだけどな。時間はかかるだろうから、先帰れよ」

神威の言葉はどこかぶっきらぼうだった。

実際はめんどくさがりのため、委員の仕事をやらされることに不満を感じているのだ。

「そうですねー。じゃあ先帰りますね。お仕事頑張ってください
っ」

ゆのはめんどくさそうな神威に笑顔でそう言って教室をあとにした。

神威は去っていくゆのにめんどくさそうに手を振った。

ゆのの友達とはつくに帰ったあとで結局一人で帰ることになった。

神威と知り合ってから一人で帰ることが少なくなった。

友達は居るが帰る方向が反対だったり、付き合いがあったりといつも一緒というわけにはいかない。

ゆのの家は学園からは少し離れた住宅街に位置している。そのため一定の時間を過ぎると人通りが極端に少なくなるのだ。

「なんだか……変な感じ……」

体に感じる奇妙な感覚にゆのは思わずそう呟いていた。

「なるほど。無意識とはいえ、俺の気配に気付いたか」

「……」

ゆのはいきなり背後からした声に心臓が飛び出しそうになった。さつきまで確かに誰もいなかったはずなのに、いつのまにかそいつは後ろ立っていた。

銀髪に整った顔立ちの男。年は神威と同じくらい。そして全身白い服という異様な姿。そして何よりゆのを驚かせたのが……。

（なんだか……冷たくて怖い……）

白という聖なる色をまとっているにも関わらず、溢れだしている気配はどす黒いもので、相手の命など簡単にそぎ取ってしまうのではないか——そう、それは死神が目の前に立っているかのようだった。

「お前は運命つてものを信じるか？」

「え？」

男は唐突にそんなことを聞いてきた。

ポカンとしているゆのに、男は構わず続けた。

「俺はな、こうみえても運命というものを信じてる。なぜなら出会いという事柄自体が運命じみている、そう感じるからだ」

男が淡々と語る。

視線は常にゆのに向けられており、その向けられた視線のせいでゆのは動けずにいた。

「運命には2つあると思ってる。偶然と必然の2つだ。起きる事柄は常にこのどちらかを含んでいる。どちらのほうが価値のある運命かどうか、それを決めるとするならば、俺は必然のほうだと思う。なぜなら、必然的に出会うということは、出会うべくして出会ったということになるからな」

男はため息をつき肩を落とした。

「だが、お前との出会いは偶然なのか必然なのか実に微妙な位置なんだよ。夢という曖昧な世界で出会い、その夢に誘われるように俺

は今おまえの前に立っている。まるで俺がお前を求めているかのようじゃないか」

ヤレヤレという感じに首をふった。

そして男は鋭い視線をゆのに向けた。

ゆのは思わず体をビクつかせた。

「そう考えて俺は思ったんだよ。俺が見ていた夢は俺の運命ではなく、お前の運命だったんじゃないかってな。正確にはお前たち、か」男はゆのに手を伸ばす。

「つまり俺が見たのはこの夜神夢幻やがみむげんに殺されるというお前たちの運命だったということだ……」

夜神夢幻と名乗った男が放ったその言葉と同時に、ゆのの意識は薄れていった。

夜神夢幻は気を失ったゆのを抱え込んだ。

そのタイミングを狙ったかのように、ゆののカバンについていた猫のキーホルダーが落ちた。

「……」

夢幻はそのキーホルダーを少しの間見つめた。

「なるほど……」

夢幻はそう呟くと踵を返した。

「呼んでくるが良い。アイツが来て初めて役者が揃うんだからな」

誰かいるわけでも無いのに、誰かに告げるかのようにそう言った。

そして夢幻は返事を待つことなく、その場から姿を消した。

第一章 出会いそして過去？

学級委員といってもやることは雑用ばかりだ。

基本的な仕事と言えば教師の手伝いに放課後の掃除くらい。

委員長は全校会議という全校の委員長と学園長が参加する会議に出席するという大役があるが、それ以下のましてや書記である神威にはまったく関係の無い話だった。

「まったく……お前はよ」

神威はほつきを片手に愚痴をこぼした。

「まあまあそう怒るなよ」

窓拭きをしていた会計の倉高正人くらたかまさとはあっけらかんと言った。

学級委員は委員長1人、副委員長、会計、書記が2人ずつの7人構成だ。

毎日の掃除は7人のうち2人が行うことになっていて、交代制となっている。

本来なら今日は神威と倉高が掃除当番の日では無かったのだが……。

「やっぱり毎日同じじゃ面白くないじゃん！」

掃除が始まる少し前に倉高は委員長を除く5人を呼び出しそう叫んだ。

「また何よ、バカ高」

会計の波木なみきそよ風は呆れた様子でそう言った。

「バカって言うな！俺は大真面目だっ」

「ぶ。ぶ。」

副委員長の長谷川太路はせがわだいじはいつもの倉高節に笑いをこぼした。

「俺らは毎日決まったルールに従って掃除当番してる。そんなんじ

「やなんか面白くないっ」

拳を握り締め、倉高は熱く語る。

神威はその姿を見てマズいと思った。

「これからは掃除前にジャンケンでその日の当番を決めようぜ！戦う俺たちには運も必要だろ？スリルを楽しみたくなかった！？」

神威はやっぱりと内心慌てた。

倉高はよくこういった滅茶苦茶な発言をしては周り、主に神威を困らせていた。

「まあわかるがな……そこは——」

「いいよ。やろうか」

神威の間に入って賛成したのは長谷川だった。

長谷川は今日の掃除当番である。うまく行けば当番を避けられるのだから乗らないはずもない。

「そうねえ。バカ高がそこまで言うならやってもいいけど……二人はどうする？」

今まで黙っていた副委員長の早稲田こよみわせだこよみと書記の吉田美代よしだみよは、共に別にいいと言って賛成した。

「よっしゃ！早速やろうぜ」

神威のことなどまるで無視し事は進行していく。

各ペアの代表が1人ずつ前にでる。

「神威、ここは言い出しっぺの俺が行くからよっ」

「いや、お前は……」

「大丈夫。俺は結構運が良いからジャンケンも強いんだぜ」

と倉高は自信満々に言った。

神威はもうどうにでもなれと諦めた。

そうして結果として倉高は負けた。

倉高がバカなのもあるが……。

（波木と長谷川も手加減なしだな……）

波木は呪術士タイプと呼ばれる魔法使いで、幻術を主に用いる。

波木は倉高に幻術をかけ、倉高は幻の中でジャンケンを行う。

波木は幻相手に倉高が出した手に勝てる手を出し、幻術をとく。

そしてもう一人の長谷川は拳闘士と呼ばれる魔法使いで肉体強化の魔法を使う。

長谷川は波木が幻術で倉高に絶対に勝つ手をだすとわかっていて、そして強化した動体視力で波木が出す手を瞬時に読み取り、波木と同じ手を出す。

つまり倉高は始まる前から負けることが決まっていたのだ。

倉高が負けた要因はバカが付くくらいの真面目な性格にある。倉高も長谷川同様に動体視力を強化すれば、長谷川の手を読み取り、二人を負かせたかもしれない。

それをしなかった理由は正々堂々じゃないから、だそうだ。

倉高の誠実さは良いことであるのだが、ペアを組んでいる神威からすれば迷惑でしかなかった。

「そっぴゃよ……」

「なんだよ？」

神威は投げやりに言った。

倉高はそんな神威のことなど構わずに続きを口にした。

「お前、結構ゆのちゃんと付き合ってるの？」

思いもよらない倉高の言葉に神威は思わず、

「はあ？」

と間抜けな顔をして間抜けな声を出してしまった。

「とぼけんなよ。お前等が仲良く飯食つてるとこ見たんだぜ。それにこころへんの男の間じゃ結構噂になってるぞ」

噂になっているなどまったく知らなかった。そんなことになるとは思っても居ないからだ。

「ゆのちゃんって言えば中等部で五本指に入る美少女だぜ。清純を

形にしたような身振り素振りは男をメロメロにしちゃうんだぜっ！」
「なんだ、そりゃ……」

ずいぶんな過剰評価だなと一瞬思ったが、確かにゆのはそこらへんの子とは一線を越えて可愛かった。

神威は恋愛や女の子の話などにあまり興味がないため、ゆのの噂も耳に入っていた程度で思っていたし、友人が熱く語るのを見てもそんなにいいものだろうか——と疑問に思うこともあった。

だが接してみるとゆのには魅力があった。

大げさに言えば慈愛の女神のような暖かさを感じる。

（改めてゆのの人気の理由がわかったような気がするな）

熱く語る倉高を横目にそう思った。

そしてそれと同時に、敵は身近にもいるかもしれないと思った。

（人気があればその分アブナイ思考の奴が現れるからな）

倉高がそうならなければいいけど……と真面目に考えてしまったことは本人には秘密である。

掃除も大体終わり、神威は一息ついた。

倉高も凝り固まった筋肉をほぐすため思いっきり伸びをした。

「さてと……」

使い終わった掃除用具を片付けるために倉高は教室から出ようとした。

「カムイ——!!」

「!!!?」

耳を突くような大声と突如生温かいものが顔に張り付いてきて、倉高は声にならない悲鳴をあげて倒れた。

「た、タマ!？」

ゆのの飼い猫であるタマが倉高の顔の上で息を荒くして立っていた。

「どうしたんだ？ゆのと一緒じゃなかったのか？」

いつもならタマはストラップに化けてゆののカバンにぶら下がっているはずだ。

「ゆのがさらわれたにゃ！」

「なんだって？さらわれた？誰に？」

「銀髪に全身真っ白の男にゃ。かなりヤバそうな目をしていたにゃ！」

ゆのの話を聞いて、ゆのが狙われていることはわかっていたが、正直甘く考えていた。

この魔法使いの巣窟といっても過言ではない学園にいるのだから、敵も簡単に襲ってこないと思っていたのだ。

「くそつ。どこに行ったかわかるか？」

「場所ならわかるにゃ！ゆのの魔力なら探知出来るからそれを追えばいいにゃ！」

神威はタマを肩に乗せ、教室を出ようとした。

「ま、まてよっ」

倉高が頭を押さえながら立ち上がっていた。

「俺の聞いた話が本当なら、そいつはヤバイ」

「ヤバイ？」

いつになくまじめな顔をしている倉高にただならぬものを感じた。

「たぶんそいつは夜神夢幻だよ」

神威もその名を聞いたことがあった。全身を真っ白に包んだ剣士型魔法使いで、敵ならばゴーストだろうと生きた人間だろうと構わずに抹殺する凄腕の使い手。別名――。

「白い死神……」

神威がその名を口にするとう倉高は息を飲んで頷いた。

「いくらなんでも相手が悪い。いくらゆのちゃんの為とはいえ、命を捨てに行くもんだぞ」

倉高の言うことにも一理あった。

出会って間もない一人の女の子の為に死地に赴くのはただの死に

たがりである。

だが――。

「一度繋いだ絆は失いたくない。昔みたいに……」

「え？なんだって？」

神威は倉高のことを無視し教室から飛び出した。

第一章 出会いそして過去？

夜神夢幻は気を失い、倒れているゆのを見つめていた。

（見る限りはただの女の子だな）

害があるようには到底見えない。

だが夢の中では明らかな悪意を放っていた。

倒せと言う意思。

それがどこから来るのかはわからないが、あの夢を見た後は必ずその意思が夢幻の中でざわめくのだ。

「うーん……」

ゆのが目を覚ました。

夢幻は立ち上がり、ゆののほうへゆっくり歩み寄った。

目を覚ますと気持ちの良い風が頬をさすった。そしてここがなじみの学校の屋上であることがすぐにわかった。

「目が覚めたか？」

「……」

ゆのは体をビクつかせて声のしたほうを向いた。

そこに立っている人物——夜神夢幻の姿を視界に捉え、ゆのは自分が攫われたことを思い出した。

「悪いが、お前には死んでもらう」

「えっ!？」

さらっと夢幻が口にした言葉はすぐに理解できず、呆然とした。だが次の瞬間、夢幻が手からチェーンソーと大剣を合わせたような巨大な剣を出現させたことにより、ゆのは一気に現実を引き戻された。

剣を手にゆのに迫る夢幻には確かな殺意と悪意が感じられた。

なのに――。

（全然悪い人だと思えない。むしろ優しい人のような、不思議な気配……）

目の前で放たれている気配と感じ取れる気配が真逆でゆのは困惑した。

夢幻はそのようなことをゆのが思っているなどと露ほども知らずに向かってくる。

と、夢幻が歩みを止まった。

「きたか……」

扉の方に向き直り、そう言った。

突然扉が弾け飛び、辺り煙が舞った。

そしてその煙の中から剣先を夢幻に向け飛び出してくる神威の姿があった。

ギィインと金属の当たり合う音がし、ゆのは神威の攻撃が夢幻に止められたことを悟った。

この瞬間、二人の視線が交わった。

これが二人の出会いであり、二人の戦いの始まりであった。

神威は相手の不意を突こうと扉の向こうから攻撃を繰り出した。だがその攻撃はいとも簡単に受け止められてしまった。

攻撃失敗後、すぐに後ろに飛び退き間合いを取った。そして間合いを取りつつゆのに近づいた。

「怪我はないか？」

「は、はいっ」

「そうか」

ゆのの無事を確認した神威は夢幻に意識を集中する。

神威がゆのを気にかける際に出来た隙を夢幻は見逃した。

まるでゆのを人質に取る必要など初めから無いと言っているかの

ようだった。

あくまで神威を呼び寄せするためのエサだったと。

「結槻ゆのを殺すのはお前を殺してからだ」

「！！」

夢幻は神威の心情を悟ったかのようにそう言った。

「なぜ俺たちを狙う？」

「さあな。自分自身に聞いてみることだ。俺はただこの世に害のあるものを排除するだけ……」

夢幻の体がふわりと浮き上がったかと思うと開いていた間合いは一瞬にして縮んだ。

（速い！！）

すでに夢幻の間合いに入っている。

神威はとっさに手に持った刀を上段に構え、足に力を入れた。それとほぼ同時。

夢幻の大剣が上から振り下ろされ、神威の刀に直撃した。

「いい刀だな。俺のホワイトドラグーンの攻撃を受けて碎けないのは大したもんだ。それに中々良い読みだ」

「ちっ」

神威はすぐに後ろに飛び、再び間合いを取った。

神威のマテリアル『上弦の月』は小太刀である。

攻撃力はいまひとつだが、防御と速さに長けている。

その防御の長所をさらに強化するために、特殊な金属で作られており、多少の攻撃では壊れない。

とはいえ――。

（さすがにあのパワーには碎かれるかと思ったぜ）

すべてを破壊してしまうかのようなパワー。そしてスピード。確かに噂になるだけのことはある。

だが神威がすべてに置いて劣っているわけではなかった。

神威には神威の武器があるのだ。

（思ったよりやるな……）

実のところ、さっきの一撃で仕留められると夢幻は思っていた。だが神威は夢幻の予想を上回る読みで攻撃を防いできた。

神威の持つ最大の武器、それは洞察力。

長引けば長引くほど、戦況は悪くなる。

ならば神威が夢幻を知る前に倒さなくてはならない。

（ならば……）

一瞬ホワイトドラゴンに手を添え、下段に構えた。そして神威を真っ直ぐに見据えて一気に駆けていった。

第一章 出会いそして過去？

神威は突然の猛攻に少し虚をつかれた。

この夜神夢幻という男は油断しない、冷静さを掛け持った人間だと感じていたからだ。

ゆえに何の考えもなしに向かってくるなど有り得なかった。

（何を隠してる！！？）

気になるのは一瞬大剣に触れたこと。

その瞬間を目の当たりにしてはいるがそれが何を意味するかはわからなかった。

（今は守りに……）

神威は再び守りの体制に入った。

守るためには攻撃する以上に相手を見なくては行けない。よりダメージを減らせるように防御するためだ。

神威も当然のように夢幻の動きにさらなる注意を向けた。

攻撃に転じるよりもわずかだが、見ることに意識を集中出来る。

次の瞬間、その集中が神威を救うことになる。

（！！）

夢幻の刃は神威に向けられていなかった。

剣先は地面に接して、火花を散らしていたのだ。

その光景を目にし、先ほどの夢幻が大剣に触れるという行為にどんな意味があったのか、それが理解できたのだ。

（まずい！）

神威さとしさに後ろに飛んだ。

「もう遅い」

夢幻の大剣の剣先から火の玉があがったかと思うと、突然その火の玉が爆発したのだ。

「があっ！！」

寸でのところで反応したため、直撃はまのがれたが、爆発の衝撃

はどうしようも出来ず、神威の体は激しい衝撃に襲われた。

そしてそれに追い討ちをかけるかのように吹き飛ばされた体を屋上のフェンスに叩きつけられた。

「ぐ……」

一瞬息がつまり、意識を失いかけた。

だが無理やり意識を戻し、自分の体の状態を確認した。

（幸い骨には異常なさそうだな。しかしこりや明日全身痛みで動けないかもな……）

自虐的な笑みを浮かべた。今出来るのはそれくらいだった。

近付いてくる夢幻の前に、神威は為すすべもなかった。

「神威さんっ！！」

ゆのは爆風に吹き飛ばされた神威に声を投げかけた。

神威はチラリとゆのを見たがすぐに夢幻に向き直った。

見た目では大きな傷を追っているようには見えない。

だがたとえそれが大した傷でなくとも今まで通りに動くことは難しい。

ましてや相手は夜神夢幻という死神なのだから。

「どうしよう……私に出来ることないの……？」

かつて一度だけ魔法発動させたがそれっきりだ。

聖十字学園に入ればまだ少しは使えるようになるかと思っただ、

それは甘い考えだった。

「何も出来ない……」

かつて両親を失ったときに味わった無力感。今また大切な人を失ってしまうのだろうか？

「諦めちゃダメだにや」

ゆのの肩に肉球を置いてタマがそう言った。

「タマちゃん……」

「ゆのは昔とは違うにや。魔法は使えなくても、魔法の知識はしっかり学んだはずだにや。にやから今ならきつと呼べるはずだにや」

「呼べる？」

タマは頷いてしつかりとゆのを見た。

「ゆのにしかないもの。ゆののマテリアルメビウス、創世の書だにや！」

かつて父が調べていた書物。父は実物を手にしたわけではなかったため、それがどのような内容の物であったかはわからなかったという。

「で、でもどうやって出せばいいかわからないし……」

「やり方自体は習ったにや。ただ少しだけゆの場合はことにやるけど」

ギイイーン！

タマとゆのが話している最中に耳を射抜くような大きな音がした。音がした方を向くと、夢幻がフェンスをチェーンソーで切り裂いている姿が見えた。

神威は転がるようにして横に逃げており、夢幻が神威を攻撃する過程でこうなったことが容易に予想できた。

「悩んでる暇はないんだ……」

ゆのは手で胸を押さえた。そして一度深呼吸すると目を閉じた。マテリアルは自身が作り出した魔法空間に格納し、そこから取り出したりしまったりする。

だがマテリアルメビウスは例えるなら自然が作り出した産物のようなもので、人がどうこうできるものではない。

いったいどこに存在し、どう使うのか。それがまったくわからないのだ。

ゆのはかつて教師に言っていたことを思い出し、それにすぎた。（先生言ってたよね。マテリアルメビウスは呼ぶのではなく、惹きつけるものだから強い意思、願いがあればきつと呼べるって）

昔に一度使ったときのように、誰かを、神威を助けたいと強く願った。

そしてそれはまばゆい光と共に現れた。

第一章 出会いそして過去？

ゆのは閉じた目を開けて、目の前に広がれば光景に目を疑った。

「ここは……？」

見渡す限り真っ白だった。

空も大地も見境なく白く、まるで光の中にいるかのようにだった。

「おかえり。そろそろ来ると思ってたよ」

「あ……」

ゆのの目の前にベッドが一つあり、その上にはパジャマを着た女の子が座っていた。

（なんで気付かなかったんだろう。それになんだかこの人……）

ベッドに座った女の子はゆのに瓜二つだった。すり替わったらまずわからないだろう。

「あなたが……創世の書？」

女の子は微笑みを浮かべ、首を横にふった。

「そうとも言えるし、そうとも言えない。あえて何だというならワタシはアナタ」

「え？」

「ここはアナタが見る世界の始まりと終わりが同時に存在する場所。二年前、一度ワタシと繋がったよね。でもあれは少し早すぎた。でも今回はバッチリ。アナタがワタシを認識して、初めてこの世界は意味を持ち、あのセカイは動き出す」

女の子は到底ゆのには理解できないことスラスラと述べた。

女の子はポカンとしているゆのを見てクスクスと笑った。

「そのうちわかるよ。それより、これ」

いつのまにか女の子の手には重たそうな大きな本が握られていた。

「これが創世の書だよ」

ゆのは創世の書を受け取った。見た目に反してもものすごく軽く手にしている感覚が無かった。

「使い方はもうわかるはずだよ。全部じゃないけど……。教えてあげたいけど時間なさそうだもんね」

女の子がそう言うと、ゆのの視界が揺らめいた。元の世界に戻るんだとゆのは直感した。

「待って！」

ゆのの意志に反し、視界はどんどん薄れていく。

そんな中ゆのは女の子が微笑みを浮かべているのを見た。

「神威くんと夢幻くんのこと、よろしくね」

（え？）

「2人ともワタシの大切な友達だから……」

その言葉最後に女の子の姿は見えなくなった。

そしてゆのの意識は元の世界へと戻っていった。

「すごいにやつ！やったにゃ！」

隣で大騒ぎするタマの声でゆのは現実に戻ってきたことを実感した。

（夢？）

どうやらゆのの体験したことはほんの数秒の出来事だったらしい。夢と勘違いしてもおかしくはないが、ゆのは今自分に起きたことが夢でなかったことをすぐ理解することになる。

「えっ……」

ゆのの背中には光の翼が生えていた。

翼は片翼だけで、それほど大きくはない。

天使の翼のような形状で、先がくつきり見えるほど透けていた。

「これって？」

「間違いないにゃ！創世の書の力にゃー！」

ゆのは創世の書の名を耳にし、自分の手の中にそれがあることを今知った。

女の子の言うとおり、ゆのには創世の書の使い方が自然と浮かんで来るようになっていた。

そして自分が何をすべきか、それも同時に理解していた。

（誰も傷つけない……。二人とも助けたい）

ゆのは学園で学んだ魔力の種類について思い出していた。

魔力は大きく二分して誠実を正義など正のイメージの象徴である蒼い魔力。悪意や殺意など負のイメージの象徴である紅い魔力。

創世の書の力で人に流れる魔力をとらえられるようになったゆのは夢幻の体に流れる魔力に不信感を抱いた。

（あの人の体に、紅と蒼の魔力が混在してる……）

よほどのことが無ければ人はどちらかの魔力に分類されるという。それを前提に2つの魔力が混在している状況が何を表しているのかを考えると――。

（確かその場合って他からの魔力の干渉を受けてるってことだったよね。ってことは誰かから何か魔法をかけられている！？）

ゆのは創世の書の上に手を広げた。

するとページが勝手にめくられていき、あるところで止まった。

（魔力イメージの実体化。これなら何かわかるかも）

ゆのは呪文を口ずさみ、そして夢幻に魔法を放った。

魔法は夢幻の体を包み込み、魔力を少しずつ形にしていた。

第一章 出会いそして過去？

神威は今起きている事態に正直戸惑っていた。

突然ゆのの背中に羽が生えたかと思えば、今までのゆのからは想像できないほどの強力な魔力を解き放った。

それだけではない。

目の前に迫ってきていた夢幻が突然苦しみだしたのだ。

「ぐっ！がああ！？」

体を抑え苦痛に顔を歪めている。

「神威さんっ！上！！」

（上？）

神威は苦しむ夢幻の頭上を見た。そして何かが渦巻いていることに気付いた。

（これは！）

神威は眼に魔力を集中させ、それを視た。

「！！！？」

夢幻の頭上には貧相な格好したピエロが浮かんでいた。

両手には気の棒をクロスさせたものを持ち、その棒からは紅い魔力の糸が垂れていた。魔力の糸は夢幻の手足、頭に繋がっていた。

これを見た神威はこう思った。

（まるで操り人形じゃないか）

人形劇で人形を操る芸人のように、ドクロの顔を持つピエロは夢幻を操っているのだ。

「な、なにあれ！？」

実体化した紅い魔力を目にしたゆのは思わずそう言った。

「あれはきつとドールマスターだにゃ。やっぱりまた始まるんだにゃ……」

「タマちゃん？」

ひとりでブツブツと呟くタマに違和感を感じはしたが、今は目の前に起きている状況を打破するのが先だった。

ゆのは目を凝らし、ピエロを見た。

そしてピエロの垂らす糸が体に巻き付いているのではなく、体内に入り込み侵食していることに気がついた。

（あのピエロを倒せばどうにかなるかもっ）

実体化した魔力ならば、魔法使いの力を持つてすれば倒すことが出来る。

ゆのは神威に視線を向けた。神威と目が合い、そして神威が頷いた。

ゆのが伝えたいことが何かすぐわかった。

神威にもピエロから出ている魔力の糸が夢幻を操っていることが理解できていた。

ゆえにこのピエロを滅することがこの事態を打開する良策なのだとわかっていた。

神威はひと息吐いて、体を落ち着かせた。

そしてピエロを睨みつけた。

ギギ――。

ピエロの口から不気味な声が漏れた。

ピエロが神威に視られていることを認識したのだ。

夢幻が武器を振り上げ、神威を攻撃する。

だがその攻撃は今までの夢幻のものとはキレが無く、ピエロが夢幻の体を使い攻撃していることを容易に感じさせた。

神威はその攻撃をすんなりと避け、飛び上がった。

一瞬ピエロと目が合う。

「消える。この悪趣味野郎」

神威の一刀がピエロを真っ二つにした。

ピエロは雄叫びを上げながら空中に四散していった。

第一章 出会いそして過去？

夢幻は息を荒くし、その場に膝ついてしまっていた。

神威はその様子を見ながら、安堵の息をついた。

「神威さんっ」

ゆのが走り寄ってきた。

背中の中も大きな本も消えていた。

「助かったよ。ゆののおかげだ」

ゆのは顔を赤くして照れ笑いを浮かべた。

「ほとんど神威さんのおかげだよ。でもこれで終わったんだねっ」

ゆのの言葉に神威はすぐには頷けなかった。

これで終わり——そう思えなかったからだ。

「お前もまだ終わってない。そう思ってるのか？」

神威の心中を悟ったかのように、夢幻はゆっくり立ち上がりながらそう言った。

「俺が見た夢や、お前や結槻に抱いていた感情は操られていたことによる影響かもしれない。だが、お前との決着をつけないければという気持ちは、どうやら俺のものらしい」

夢幻はホワイトドラグーンを握り、剣先を神威に向けた。

「決着をつけようぜ」

「神威さん……」

ゆのの心配そうな顔を見て神威は笑顔を向けた。

「大丈夫」

ゆのに離れるように言って、神威は上弦の月を構えて夢幻に対峙する。

ゆのがそこならば攻撃の影響を受けないだろう、という所まで離れた瞬間、夢幻が動いた。

夢幻の体は万全とまでは行かないが、神威のダメージと比べれば

まだ自分の方が優位にたっていると考えていた。

夢幻が先ほど神威に放った火の玉は爆塵符と呼ばれる呪術を札に書き込んで発動させたものだ。

夢幻は剣士としては一流だが、呪術士としてはお世辞にも出来るほうではない。

呪術を得意とするものならば、韻と呼ばれる呪文を唱えれば呪術を使えるのに対し、夢幻は札に与えたい効果の韻を書き込み、その上で使用前に魔力の注入、そして起爆剤を必要とする。

例えば先ほど使用した爆塵符は起爆剤として火を必要とする。

夢幻はホワイトドラグーンで地面を削り、その際に発生する火花を利用している。

これら一連の動作は特徴があるため相手にばれやすい。

ゆえになるべく長期戦を目的に使用するには少々問題があった。

（だが関係ない。意識を逸らせれば充分）

そう、呪術はあくまでおとり。

意識を逸らしたり、隙を与えたり出来ればいい。

爆発系の呪術を使うのも、爆発という効果が相手を怯ませやすいからだ。

相手に見切られていても早々この連携から逃れられない。

（くらえ……神威！）

夢幻は先ほど同様、札に魔力を流し、そしてホワイトドラグーンで火花を起こして着火させた。

爆塵符は神威を巻き込みながら爆発した。

夢幻は神威の生死に構わず、神威の居た場所に斬撃を繰り出した。例え読めていたとしても爆風の巻き起こる方向や、この爆煙の中で夢幻の一撃を避けるのは難しい。

現実に神威は爆発の起きるときにはまだ動くことすら出来ていなかった。

致命傷を与えた——そう確信したとき、夢幻の上空で風を切る音がした。

爆発の余波にしては鋭すぎる、まさに切るような音だった。

「！！！」

夢幻の右上空、そこに神威の姿があった。

神威は鋭い視線をむけ、夢幻の首に狙いを定めていた。

「神威！！お前っ」

草薙神威。

この男の武器、それは――。

神威の武器、それは速さだった。

足に貯めた魔力を瞬間的にロケットエンジンのように噴射させ、加速する。

相手が視界に捉えるのすら不可能にする速さ。魔力操作を得意とする神威だからこそ出来る、絶妙な魔力のパワーバランスにより、この速さは生まれた。

強すぎれば魔力の噴射に耐えられずに足を失い、弱ければ十分な速さを得られず、敵に捉えられてしまう。

（今の体でこれを使えるのは一回が限度。これで仕留める！！）

神威が上弦の月を凧ぐのと同時、夢幻が雄叫びをあげた。

「うおおお！！！」

「！！？」

夢幻のホワイトドラグーンのチェーンソーが回転を始めた。

地面とチェーンソーが反発しあい、その反動でホワイトドラグーンが浮き上がる。夢幻の力と反動の力が合わさり、通常より速い剣戟が繰り出された。

ギィィィン！

二人の一撃がぶつかり合い、鼓膜を射抜くような音が響き渡った。

ゆのは二人の武器がぶつかり合い、そして二つともあらぬ方向に弾き飛ばされるのを見た。

神威の上弦の月はチェーンソーに巻き込まれて飛び、夢幻のホワ

イトドラグリーンもチェインソーと刀がぶつかり合った衝撃で飛ばされたのだ。

神威はなんとか着地はしたものの、立ち上がる力はないようだった。

夢幻はそんな神威を一瞬見て、踵をかえした。

「今日の所は引き分けだな」

そう言い、ホワイトドラグリーンを拾った。

そしてゆののほうに向き直った。

「すまなかった。あと……助かった」

そう言い残し、夢幻は屋上から消えた。

ゆのは神威に駆け寄った。

「な、大丈夫だったろ？」

神威はぎこちない笑みを浮かべた。

ゆのはそれ見て自然と笑みがこぼれた。そして今日という日がやっと終わったこと、二人が無事だったことに心の底から安堵した。

第一章 エピローグ

一夜明け、ゆのと神威は校内にある人工公園のベンチにいた。屋上は神威と夢幻の戦いであちこちが破損してしまい、今は閉鎖となっている。

神威とゆのは学園の教師にこっぴどく怒られた。ちなみに夢幻は捕まらず、説教を受けることはなかった。

だが監視映像から敵の存在が確認されたため、説教だけですんだのは幸運だった。

「先生怖かったけど、停学とか退学にならなくて良かったです。でも、放課後に校長室来いって、何の用なのかなあ？」

ゆのはオニギリを口に含み、モグモグしながら言った。

「さあな。校長直々に説教するのかね」

神威はため息をついた。すると節々が痛み、冷や汗が出た。

「俺も校長から声がかかっててな。何か面倒なことになりそうだ」

「あっ！」

「げっ」

ゆのと神威は突然現れた夢幻に驚きの声をあげた。

「な、なんだいきなり現れて!？」

「なんだとはヒドい言いようだな。俺はただ言いたいことがあって来ただけだ」

「言いたいこと？」

夢幻は頷くとゆのを見た。

「俺を救ってくれた礼にお前を護ってやる」

「ええ!？」

ゆのは牛乳のストローをくわえたままポカーンとしてしまった。

「狙われてるんだろ？」

「う、うん……」

「なら一人より二人で護った方がいいだろ？」

夢幻は神威を見てニヤリと笑った。

「俺一人じゃ不十分つか？」

神威は顔をしかめて舌打ちした。

「まあまあ」

神威をなだめるゆのの表情は笑顔だった。

神威はゆのが自分を理解してくれる人間が増えたことに喜びを感じていることがすぐにわかった。

その喜びから産まれた笑顔を壊す気には到底なれなかった。

「まっ、しょうがないか」

そう言つて神威は夢幻に手を差し出した。

夢幻はそれを、今度は信頼の笑顔で握り返した。

「よろしく頼む。草薙神威」

「こちらこそ、夜神夢幻」

二人の握手を前に、ゆのはとても心強いものを感じた。

第一章 エピローグ（後書き）

時間がだいぶかかりましたが、ようやく第一話の終了です。

もし見て頂いている方がいらっしやったら、本当にありがとうございます！

当然ながら目標は完結させることなので、これからも頑張っていくたいと思います。

第二章 プロローグ？

結槻ゆの、夜神夢幻、草薙神威の三人は学園長室を訪れていた。

三人とも学園長を見るのは初めてである。と言つのも、学園長が姿を現すことは全くという程なく、その姿を知っている者は学園全体の一握りしか居ない。

ゆえに、三人は学園長室に呼ばれたことに対し、何か良くないことが起こるのではないかと危惧していた。

部屋は広く、本棚に周囲を囲まれている。そして三人の前に立派な机、椅子。

椅子には推定年齢40歳ほどの男が座っていた。

（これが学園長……）

神威が思ったこと、それはだいたい若いなということだった。

神威はもつと威厳のある、年のいった老人をイメージしていた。

「イメージと違っていたかい？」

男は神威の考えを悟ったかのようにそう言った。

「まあ私は学園長ではないから。そもそもこの学校には学園長は存在しないからね」

男はとんでもないことをまるでどうでも良いことを話するときのような調子で言った。

「えっえっ？だって私たちは学園長先生に呼ばれて……」

ゆのは困惑していた。

神威も同様に困惑していたが、夢幻だけはそうではなかった。

「学園長が居ないことは知っている。ジーサンから聞いてるからな。まあもつとも、その事実を知っているのはごく一部だがな」

「そうか。君の保護者は兼三さんけんぞうだもんな。知っていてもおかしくはないか」

勝手に納得している二人に神威とゆのはまるでついて行けていなかった。

「つまりどうということなんだ？なんで隠す必要がある？」

「一つの理由としては、学校というスタイルを取る以上、トップが不在では示しがないということ。ましてや魔法を扱う特集な学校だ。学校を治める偉大な魔法使い——それだけでも十分に威厳を感じるだろ？そしてもう一つ。まあこれが一番の理由と言っても過言じゃないかな。とても人に見せられるモノじゃないのさ」

男はやれやれと首を振って見せた。

「見せられないモノ？」

神威は夢幻を見た。

だが夢幻ももう一つの理由については聞かされておらず、首を振って返すことしかできなかった。

男の言いぐさからは、学園長は存在しない。その理由は人ではないから——そう言っているように聞こえた。

「君たちはこの学園誕生の話を知っているかい？」

男はいきなり話を変えた。

三人は聞かれたことに対する答えを持っていなかったため、答えることが出来なかった。

「時代ははつきりしてないけれど、ある時から世界中にゴーストと魔法使いが現れるようになった。ある教会に属していたマリアは千里眼と呼ばれる遠くの事象や未来の出来事をみることが出来た珍しい魔法使いだった」

いきなりなぜこのような話をするのか、神威は疑問に感じたが口に出すことはしなかった。あながちこの話が無関係とは思えなかったからだ。

「マリアは能力とその名から、教会の者達から聖母と呼ばれて神格化されていた。マリアの言うことは神のお告げだと信じられ、絶対だった。あ、別にマリアは欲深かった訳じゃないよ。ただ一つのワガママを除いて、マリアは自分の欲を満たそうとする行動など取ったことは無かったからね」

「ワガママ……ですか？」

ゆのが不思議そうな顔で言ったのを見て、男は笑った。

「そうだよ、日本に行きたいというワガママさ」

「そのマリアってのは、千里眼で見たんだな？日本で何かが起きているのを」

夢幻がそう口にすると男は夢幻を指差して、

「そのとおり」

と感心した。

「マリアは日本という地にゴースト、そして魔法使い出現の元凶を見たのさ」

「元凶……」

神威は唾を飲んだ。

その元凶がゆのを襲った者かもしれないのだ。

「奴らは神を殺す者『レヴェリオン』と呼ばれている。誰がリーダーでどのようなメンバー構成なのかはわからない。ただわかっていることは、奴らは老いることもなく、寿命で死ぬこともないってことだ」

「そいつらはゴーストなのか？」

不老不死となればもつとも近い存在はゴーストだ。

男は夢幻の言葉を否定するように首を振った。

「わかっているメンバーに限るが、その者たちはゴーストではない。まああくまでゴーストは奴らの手下というところなんだろうね」

神威はこれから自分たちが立ち向かおうとしている相手がとんでもなく強大な相手なのだと痛感させられた。

神威たちが倒してきたゴーストたちは末端でしかなく、誰も知らない深淵の底に姿、形すらわからない敵が潜んでいるのだから。

「俺たちにこんな話をするってことは、俺を操っていたピエロ野郎はそいつらの仲間なんだな？」

夢幻は苦虫を噛み潰したかのような表情で、怒気を込めた声でそう問うた。

「マリアが言うにはそうらしいね」

男は立ち上がり、ある本棚の前に立った。そして本棚の中にある一冊を手に取り、何やら呪文を唱えた。

するとその本棚は消え去り、そのかわりに扉が現れた。

「さあマリアがお待ちかねだ」

三人は男に引き連れられ、部屋に入った。

そうして三人は絶句する。予想を遥かに越えた存在に。

第二章 プロローグ？

想像をこえた存在に三人は絶句していた。

「ま、まさか、これがマリア？」

神威の言葉に男が頷く。

三人の前には青く光る巨大な球体があった。球体はゆっくり回転しながら、心臓の鼓動のように定期的に光っていた。

『待っていました。ユノさん』

球体から言葉が発せられた。

『今回は彼らよりも早く、あなたに出会うことができました』

マリアは突然意味不明なことを言い出した。

「えつと……私のこと、知っているんですか？」

『ふふ。ずっと昔から知っています。私が産まれたときから……』

まったく先の見えない話にゆのは首を傾げた。

それは神威や夢幻も同様で、ただマリアの言葉を待つしかなかった。

『ユノさん、あなたは生まれ変わる度に彼らに殺されてしまっているのです』

「えつ……？」

ゆのだけではなく、神威も夢幻も言葉を失った。まるで意味がわからなかったからだ。

『彼らはあなたの命を奪うために存在しているといっても過言ではありません』

「それって……」

マリアの言うことが本当ならば、ゆの周りで傷つく者はゆのが居るが為に傷ついてしまっている。その事実ゆのは心を抉られ、その場に崩れ落ちてしまった。

自分の命が失われることよりも、自分のせいで人が傷つくことのほうが耐え難かった。

ゆのがそう思い、悲しんでいるのだと夢幻はすぐに理解できた。
夢幻は敵を滅するために産まれ、そのためなら他人犠牲にするのは致し方ないと考えてきた。

その考えは今も変わらないが、なぜかゆのだけは自分がどうなるうとも護らなくていけない——そう思うのだ。

だからなのか、ゆのが悲しむ姿をみるとその原因に対して怒りを覚えた。

「なぜそいつらは結槻を狙う？」

明らかな殺気を含め夢幻は言った。

ピリピリした空気が一気に周辺を支配した。

『それはワタシも知りません……』

「なに？」

すべてを見通す千里眼では無かったのか。

夢幻は思いも寄らぬ答えに苛立ちを覚えた。

『ワタシはマテリアルメビウスのように無より産まれた存在。そのワタシに与えられた使命は監視であり、あくまで生きる者達の行動を見ることしか出来ないのです。その者が何を考え、何を思うのか、それを知ることとは出来ないのです。ましてや敵は何かしらの力によってワタシの目から逃れている……』

マリアがため息をついた。

夢幻は舌打ちをしてマリアから視線を逸らした。

「ゆのを狙っている敵がいることはわかった。ここまで話しておいてただそれだけってことはないだろ？」

神威はゆのに寄り添いつつそう聞いた。

『察しがよくて助かります。ワタシが頼みたいこと、それは敵についての調査とユノさんの護衛です』

「そんなこと言われずともわかってる」

夢幻が怒りを込めて言うと、マリアはそれに応えるかのように笑った。

『ふふ、そうですね。敵の手に落ちる前にユノさんを発見出来たこ

とはまさに奇跡です。だからこのチャンス逃すわけにはいきません。何としても護っていただきたいのです。そこでワタシから僅かながらあなた達に力を貸したいと思います』

その言葉を合図に、男は手から三枚のカードを出現させた。

カードからはそれぞれの小型化された立体映像が映し出されていた。この映像がなければただのガラスの板にしかみえないだろう。

男はそのカードをそれぞれに渡した。

「こ、これって!？」

神威がカードを手にするなり驚きの表情を浮かべた。

『そうです。正規ギルドメンバーの証明書です』

聖十字学園は高等部卒業後、学園の息のかかった所に就職、進学するのが通例だが、在学中にその才能が認められた者のみ、ギルドと呼ばれる組織に入ることが許される。

ギルドの役割は主に治安維持であり、その力は警察等の国家権力よりも上とされる。

ギルドメンバーは一生を約束され、当事者が死亡した場合、その遺族の生活保障まで行われる。

常に危険と隣り合わせという過酷な仕事であるにも関わらず、ギルド加入を希望する者は後を絶たない。

『本来は既存するギルドに加入してもらうのですが、今回はワタシの特権であなた達専用のギルド立ち上げを認めます。主な仕事は先ほど申したとおりですが、敵のことやユノさんのことを周りに知られるわけにはいきません。ですから表向きは学園の治安維持のために活動していることにし、依頼があれば出来る限り動いてください』
「なるほど。何でも屋を引き受けると言うことか」

夢幻はカードを弄びながら、皮肉まじりに言った。

『悪いことばかりではありませんよ。情報はどこに落ちているかわかりませんからね』

皮肉ったつもりが逆に返されてしまい、夢幻は押し黙ってしまった。

マリアは静かに笑った。マリアが微笑んでいるのだろうと想像できた。

『ギルドにはマスターが居なくてははいけません。マスターを誰にするかはあなた達で決めてください。あともしメンバーを増やそうと思ったときはそこにいる彼、ニイミさんに言ってください。ニイミさんを通してワタシが審査をし、了承の場合はカードをお渡しします』

「自己紹介が遅れたね。にいみはるひこ新美晴彦だ。用があるときはここに連絡してくれるかな」

新美は何も書かれていない名刺を神威に渡した。

「ギルドカード越しに覗いてみてくれ。そうすれば連絡先がみえるはずだ」

確かにカード越しに見ることで、一般的な名刺の姿がそこに映った。

「なるほど、これがなきやあんたにたどり着くことが出来ないわけか」

神威は感心の声を漏らした。

『それではお願いします。あなた達がギルドを立ち上げたことは明日中には広まるでしょう。そうすればおのずと相手から情報の一端を連れてきてくれるでしょう』

「そうだな。でもとりあえず続きは明日だ。まずはゆのを休ませよう」

神威の言葉に夢幻も頷いた。

神威はゆのを慰めながら何とか立たせた。

「今日はもういいだろ？」

『はい、今日のところは——』

神威たちはその場を後にした。

新美は神威たちがここから遠ざかるのを確認するとため息混じりに言葉を口にした。

「しかし良かったのかい？まだ言わなくちゃいけないことがあるだ

ろくに。この件は彼女だけの問題じゃない。それこそあの二人にだって大きく関わることだ。それに……」

『それにワタシが元は敵側の立場にいた……ということですか？』

一瞬場の空気が張り詰めた。だがすぐにマリアが笑みをこぼして空気を変えた。

『昔の話ですよ。それに今話すには早いというだけのことです』

新美は先ほどまでいたゆのの姿を思い出し頷いた。

「それにワタシが話さなくても見つけ出してくるかもしれませんよ？」

「まあね……まだ始まったばかりだしね」

神威たちが出て行った扉を目を細めて見つめて言った。

運命の齒車が回り出すのを感じ取りながら……。

第二章 家族であること？

ゆのを家に送った後、神威と夢幻は公園のベンチにいた。

「ほらよっ」

「悪いな」

夢幻は神威が放り投げた缶コーヒーを受け取った。

「草薙、お前はと思う？」

夢幻が言っていることが、先ほどのマリアとの話であることは容易に想像できた。

「疑ってんのか？」

一口缶コーヒーを飲んだ。それに続くように夢幻も一口飲んだ。

「俺はまず疑うことから始めるのさ」

「ふーん。まあ……俺も完全にあいつらを信用してるわけじゃないよ。隠してることもあるだろうしな」

神威は空を見上げた。真っ暗になった空には無数の星が輝いている。

「でも少なくとも俺たちよりは敵を知っている。それに力もな。利用させてくれるってなら、利用させてもらえばいいんじゃないか？」

「どうにでもなる……そんな口振りだな」

神威はニヤリと笑みを浮かべた。

「思っているさ。どうにかしなくちゃならないんだからな。お前だって同じようなもんだろ？」

「お前と同じにするな……と言いたいところだが、俺も似たような感覚だ。別に余裕があるわけじゃないが、どうもお前らと一緒にいるとなんとかなるような気がする」

夢幻はため息をついてから、自虐的な笑みを浮かべた。

「今までずっと一人で戦ってきた。誰かに頼るなんてことをするほうが無駄だと思っていた。なのに今は一人の女を護ろうと思い、そして仲間がいることに安堵さえ感じてしまっている。どうも俺は気

がふれてしまったようだな」

夢幻は今自分に起きている変化に戸惑っていた。だがそれが嫌なものだと感じることはなかった。

「これが俺の運命か……」

「ん？なんか言ったか？」

「別になんでもないさ」

夢幻は缶コーヒーを一気に飲み干し、ゴミ箱に投げ入れた。

「缶コーヒー代の貸しはそのうち返す」

そういい残して夢幻はどこかに去っていった。

神威は缶コーヒーを手にしたまま夢幻とは逆方向へと歩き出した。

第二章 家族であること？

マリアとの一件から一週間がたった。

神威たちが学園在学生初のギルド創設者になったことはあつという間に広がった。

広がることで神威たちがギルドメンバーに選ばれたことに疑問を感じる者が一部現れ、そういった者達の探りを退けることに多少労力を費やした。それ以外は特に問題はなく、あるとすれば自分もギルドに入りたいという野望を持った者にたかられるくらいだった。

「ふう……」

ゆのはいまだにマリアの言葉を引きずっていた。

自分が存在することで他の人が傷つく。ならばいつそ居なくなつた方がいいのではないか。そう思ったりもした。

「ねえ……ゆのちゃん？」

「えっ？あつ、はいっ」

いつのまにか目の前に人が立っていた。

その子の名は名瀬美弥子なせみやこといい、ゆののクラスメイトだ。機会があれば話すという程度で、特別親しい仲ではない。

「どうしたの？みやちゃん」

美弥子は皆からみやちゃんと呼ばれていた。ゆのもそれに習って美弥子のことをそう呼んでいた。

「ゆのちゃんってギルドメンバーなんだよね？」

ゆのは今一番つかれたくないところをつかれ、表情を曇らせた。だがゆのたちがギルドに加入したことはすでに知れ渡っており、今更隠すことも出来ない。

「う、うん……」

ゆのはとりあえずそう返事した。

すると美弥子はゆのとは対照的な太陽のような笑顔を見せた。

「ほんとなんだね！じゃあちよつとお願いしていいかな？」

「お願い??」

美弥子は一枚の写真を見せた。

「わぁーかわいい♪」

写真に写っているのはアザラシだった。まだ産まれたばかりなのか体全体に白い体毛が生えていた。

「ゴマちゃんって言うんだけど、実は迷子になっちゃったの」

「ええ!!」

「知り合いに頼んで探してもらってはいるんだけど見つからなくて……。結界があるから学園の外には出られないはずだけど、こつ見つからないと余計に心配で……。そんなときゆのちゃんの噂聞いたんだ」

「そうだったんだ……」

美弥子はゴマちゃんのことをとても大切にしているのだろう。ゴマちゃんの心配をしている美弥子の顔は本当につらそうだった。

大事なものを失うのは本当に苦しいことだ。

もし自分の力でそんな不幸な気持ちから助け出してあげられなら、頑張ってみようと思った。

（よし！みやちゃんとゴマちゃんのためにっ）

ゆのは心の中で決心した。

第二章 家族であること？

「それで引き受けたのか」

放課後、ゆのは神威と夢幻に美弥子の話をした。

そして案の定、夢幻は嫌そうな顔をした。

「だ、だってかわいそうじゃないですかっ」

「あんな、結構。俺たちは何でも屋じゃないんだ。ペット探しなんてそこらへんの探偵にでも任せればいい」

夢幻がそういい放つとゆのはむくれてしまった。そして助けを求めるように神威をみた。

神威はヤレヤレといった調子で肩をすくめた。

「まあ夢幻の言うとおり、何でもかんでも引き受けるのは良くないが、今回の件は一般の人間には頼めないって事だからゆのに話をもちかけたんじゃないか？」

「どういうことだ？」

「推測だけど、その子は学園にはられた結界から出れないからといったんだよな？つまり……」

神威がそこまで言うと言夢幻はなるほどと呟いた。

「ど、どうということなんですかつ？」

いまだにわからないままのゆのが神威に問うた。

「つまりただのペットじゃないってことさ。外に出られては困る生き物。おそらく魔法生物」

ゆのは美弥子がなんの魔法使いなのかを思い出し納得した。

「そつえばみやちゃんも魔法生物だったっけ」

魔獣士は名前の通り魔法で作られた生物や召還された使い魔を操る魔法使いだ。

「なら決まりだな。魔法が関係してるとなれば、俺たちも無視は出来ない。だろ？」

神威は夢幻を見てニヤリと笑った。

夢幻は舌打ちをして

「しょうがないな」

と言った。

「ありがとうございますっ。私一人じゃどうしていいかわからなかったから良かったですっ」

ゆのは笑顔を見せた。久しぶりに見る笑顔だった。

神威はそれを見て夢幻に目配せをした。

夢幻はそれに応えるように苦笑し、

「しょうがない……」

と改めて言った。

第二章 家族であること？

神威たちは改めて美弥子に話を聞くため、ゆののクラスを訪れていた。

美弥子は他の知り合いにも搜索を依頼したが見つからなかったと言っていた。

いくら学園が広いとはいえ、目撃者も居るだろうし、そんなに小さい生き物ではない。

それにも関わらず目的のゴマちゃんは見つからない。

そうなれば考えられるのは、何かしらの能力をもっている可能性だ。「能力ですか？能力と言うほどではないのですが、ゴマちゃんは緊張したりストレスを感じたりすると姿を消しちゃうんです」

「姿を消すって見えなくなるって事か？」

神威がそう聞くと美弥子はうーんと唸ってから答えた。

「正確には景色に同化する感じだと思います。カメレオンみたいな」神威は夢幻を見た。

渋い顔をしていた。

「かなり面倒な能力だな」

美弥子から離れた後、夢幻がポツリと呟いた。

「今まで捕まらないわけだ。しかもこれだけ魔法使いがいるとこの学園内で魔力を探知して探すのは不可能に近い……」

相手の魔力を一度でも感じたことがあれば、それを探し出すことは出来る。しかし一度も会ったことない相手の魔力を探知するなど、会ったことのない人の好きなもの知っているか？と聞いているようなものである。

神威と夢幻はゴマちゃんの特異能力についてまでは頭になかった。そのためすぐに捕まえられるだろうと思いきんでいた。

「あの……」

頭を抱える二人にゆのは控えめに声をかけた。

「創世の書の力を使えば後を追えるかも……」

「なんだって!？」

二人の声が被った。

ゆのは少し後ずさりした。

「この前使ったのは魔力探知の特化魔法みたいなんです。人に流れる魔力を見ることが出来るんですけど、所々に残った残留魔力からその人の姿を映像みたいな感じで形に出来るんです」

「ほんとうか……?」

夢幻はただそれだけしか言えなかった。神威は絶句している。

ゆのはただ不思議な空間に居た少女に教えられた創世の書の力を口にしたただけなのだが、その力は神威たちの想像を越えていた。

（残留魔力を具現化するだと……?）

夢幻は自分が操られていたときのことを思い出した。あときも敵の魔力をゆのは具現化していた。

炎や爆発を起こすというのはあくまで自分の魔力で、自分でイメージするから出来る。

だが他人の魔力を具現化したり、その場に残ったあいまいな魔力を具現化するなど、相手の魔力の性質を知り尽くしてなければ出来ない。

そのような芸当はごく一部の大魔法使いと呼ばれるような者しか出来ないだろう。

（やはり結槻には何かあるのか?）

そう思わざるおえない。夢幻は改めて自分が護ると決めた少女が特別な位置にいる存在なのだと実感させられた。

第二章 家族であること？

翌日の放課後、美弥子がゴマちゃんとはぐれたという場所に来ていた。

場所は第三訓練所と呼ばれる魔獣士専用の施設のすぐ側である。

「よし始めるか」

神威はゆのに視線を向けた。ゆのはそれを受けて創世の書を出現させた。

ゆのは目を閉じ呪文を唱えた。すると以前と同様に背中から一枚の透き通った翼が出現した。

「たくさん残留魔力があります……。さすがに全部実体化させるのは難しいです……」

「だろうなあ。時間で絞ったりできないのか？」

「ちよつと待つてくさいね」

ゆのが少し念じると勝手に創世の書のページがめくれた。まるでゆのの思いに通じていて、それに呼応しているかのようなだった。

「時間で絞るっていうのは出来ないんですけど、残留魔力の古いか新しいかはある程度区別出来るみたいです」

「確かはぐれたのは5日前くらいと言っていたか。ならば新しい残留魔力で絞ればいけるんじゃないか？」

夢幻の言葉に神威が頷いた。

「頼むよ、ゆの」

「了解ですっ」

ゆのは敬礼のポーズをふざけ半分で作って見せた。

ゆのがさらに念じるとあたりの残留魔力が少しずつ形を成していった。

最近のものだけとはいえ、普段生徒が使う場所だ。

結果として周りはちよつとしたイベントの観客席のようになっていた
「すごいなあ」

あまりの多さに神威は思わず口にした。

そこにいる人々はあくまで具現化された映像である。そのためぶつかってはすり抜け、会話しているものに割り込むように歩いていたりとなかなか奇妙な光景だった。

「おい、あれ」

人混みを睨みつけるように見ていた夢幻がある方向を指さした。

「あつ！ミヤちゃん！」

そこには美弥子とそれについて歩くゴマちゃんの姿があった。

ゴマちゃんはとても美弥子に懐いているようで、美弥子が話しかけると嬉しそうな動作をして見せた。

美弥子たちは第三訓練所を目指して歩いていた。

だがその途中――。

「おいっ！あれあれ」

神威の視線の先には、おそらく魔法生物と思われる大型の犬が主人の手を離れて走り出してしまっていた。

そして犬は美弥子の横に居たゴマちゃんに目を付け、ゴマちゃんを追いかけ始めた。

ゴマちゃんはそれに驚き、突然姿を消してしまった。

「今のがゴマの能力か！あとを追えるか！？」

夢幻はゴマちゃんが消えた場所の周りを見ながら言った。

「ゴマちゃんの残留魔力の特定が出来ました。今度はゴマちゃんだけに絞りますね」

ゆのが呪文を唱えると今まで居た人混みが消えた。

そのかわり、紫色に光った線のような物が地面に現れていた。

残留魔力を特定できたことで、対象が残した魔力の道を浮かび上がらせることが出来たのだ。

三人はその道を頼りにゴマちゃんの痕跡を追った。

だがある程度来たところでその痕跡は途絶えてしまった。

「どうしたんだ？」

神威が聞くとゆのは首を傾げた。

「わからないですけど、その草むら見てください。そこだけ他と比べて色濃く魔力が残留してるんです。きっとゴマちゃんは長い間ここに隠れてたんだと思います」

ゆのは呪文を口ずさみ、草むらに残った残留魔力を実体化した。

案の定そこにはゴマちゃんが居た。

お腹が減ったのか、美弥子とはぐれて寂しいのか、ゴマちゃんは涙を流していた。キュウキュウと鳴いていたのだろつなと、容易に想像できた。

「かわいそう……。早く見つけてあげたいよ」

ゆのは瞳を潤ませた。

夢幻はゆのの頭を撫でてやった。

「なら泣いてる暇なんてないだろ？早く次の痕跡を追おう」

ゆのは涙を拭って頷いた。

三人がこれからどう探すべきか話し合おうとしたその時、激しい破壊音が轟いたのだった。

第二章 家族であること？

音がしたのは調理室のほうだった。

「なっなんですか！？」

「わからんけどこりやめんどくさそうな感じだな……」

ドオオオン！！と再び大きな音がした。音とともに校舎から飛び出してきたのは巨大なアザラシの化け物だった。

「ありやまさか……」

「ゴマちゃん！！」

後ろから悲鳴のような大声をあげたのは美弥子だった。

「ミヤちゃん！」

ゆのが美弥子に近づき倒れそうな体を支えた。

「調理室にいたって聞いて来てみたの……きつとお腹が減っていたところに、みんなに囲まれたから……」

「だからってどうしたらああなる！写真と全然違うじゃないか！」

神威が美弥子から受け取った写真バンバン叩きながら言った。

「ゴマちゃんは過度のストレスを受けると凶暴化しちゃうんですう！」

「早くいえええ！」

神威は頭を抱えた。

夢幻はそんな神威の肩に手を置いた。

「今は漫才をやっている場合ではないだろ」

「やってねえよ！ってツツコンでる場合じゃない！」

凶暴化したゴマちゃんは学生たちを翻弄していた。

このまま行けば学園全体を巻き込む大パニックになってしまう。

「ゴマちゃん！やめて！！」

美弥子が前に出てゴマちゃんを止めようとする。だが正気を失ったゴマちゃんに美弥子の姿は見えておらず、美弥子に構わず突進してきた。

「ちっ！」

夢幻は美弥子を抱えて横に飛んだ。ゴマちゃんはそのまま壁にぶつかった。

「こりゃ、らちがあかないぞ」

「だな……」

神威はマテリアル『上弦の月』を出現させた。

同様に夢幻もホワイトドラグーンを出現させる。

「被害が広まる前に再起不能にする。命はとらない。いいか？」

夢幻の問いかけに美弥子が頷こうとした。

だが――。

「だめっ――！」

ゆのが今まで聞いたことが無いほどの大声でそれを阻止した。

「ゴマちゃんは悪くなんかないよ。ただ寂しくて、お腹が減って、でも怖くて仕方なかったんだよ！それに気がつかないで、ゴマちゃんを追い詰めたのは私たち。だからこれ以上ゴマちゃんを傷つけないで……」

ゆのは胸の前でギュツと手を握った。

「ゆのちゃん……」

ゴマちゃんを傷つけないというのが本音なのだろう。美弥子はゆのの言葉に涙した。

「ちっ……。だがな結槻。同情だけじゃ命は救えないんだぞ」

「わかってる……。私が美弥子ちゃんとゴマちゃんの心を繋ぎます！」

夢幻はゆのの瞳を見つめた。ゆのは夢幻のから一切視線を放さなかった。

夢幻はため息をついて神威に向き直った。

「やるか？」

「ゆのがそこまで言うなら試して見ようぜ」
ギユウウウ――！！

耳を貫くような雄叫びが轟いた。

ゴマちゃんは自ら貫いた壁から抜け出し、ゆっくりゆのたちに体を向けた。

「草薙、お前強化魔法は使えるか？」

「一応肉体強化の魔法なら使えるよ」

「あいにく俺は強化魔法は使えないんだ。頼めるか？」

神威は親指を立ててオーケーサインを出した。

「よし……」

夢幻はゴマちゃんを睨みつけた。

ゴマちゃんは夢幻のことを敵と認識したのか、夢幻に向けて体当たりを仕掛けてきた。

「草薙、頼む！！」

「任せとけ！」

神威が肉体強化の魔法を夢幻にかけた。

夢幻はホワイトドラグーンを地面に刺し――。

バシイン！！

突進してきたゴマちゃんを受け止めた。

「ゆの！夢幻が止めてるうちに！」

ゆのは創世の書を開いた。

「必ず止めてあげるからね！」

ゆのの背中に翼が出現する。

それを見た神威は内心驚いた。

（翼が前より大きくなっている！）

ゆのの力が増しているのだ。

神威はまだ底の見えないゆのの魔力に戦慄した。

第二章 家族であること？

ゆのが今使っている創世の書には10の力が秘められている。

ゆのもそのことを理解しているし、自分がそのうちの一つ、『セフィラ・イエソド』しか使えないことも重々承知だ。

今使える力で出来ることは何か——それを必死に探していた。

（今の私に出来るのは魔力を視て、少しだけと操作すること）

一度視たゴマちゃんの魔力を感知することは簡単だ。そしてクラスメイトの美弥子の魔力を感知することも出来る。

魔力とは生命エネルギーであり、心のようなものだ。

魔力と魔力を繋ぐことが出来れば、心での意志疎通が出来るのではないかと、ゆのは考えていた。

問題はどのようにに魔力同士を繋ぐかである。

（夢幻さんから負の魔力を引き出して具現化したようにすれば……）

ゆのはゴマちゃんの魔力を引き出し、それを糸に具現化した。同じように美弥子の魔力も糸に具現化し、二つの糸を結びつけた。

こうすれば糸電話のように繋がりはあえるはずだ。

「ミヤちゃん！」

美弥子はゆのの声に頷き、目を閉じた。

（お願い、うまくいって！）

ゆのは具現化した糸を保ちながらそう心で願った。

不安で仕方がなかった。

今思えば自信というものを持ったこと無かった。

「きゅうう」

魔法生物である自分に親などは居ないが、だからといって寂しくないわけではない。

この不安を埋めてくれる存在が欲しかった。

そんなとき美弥子ちゃんは現れた。

魔法生物は魔獣士にとって道具でしかなく使い捨てられることも珍しくない。

だが美弥子ちゃんは違った。

初めて会ったとき、涙を流しながら喜んでボクを抱いてくれた。初めて感じた温もりはとても暖かくて気持ちよかった。

『今日から家族だよ』

家族……。

ああ、なんて暖かい響きのする言葉なんだろう。

美弥子ちゃんと出会ってから楽しかった。訓練は辛かったけれども、美弥子ちゃんと一緒なら苦では無かった。

でもボクが臆病なせいで美弥子ちゃんと離れることになってしまった。

会いたくて探したけれど、知らない人がいっぱいいて、何故かボクを追ってくる人もいて怖かった。

ただ会いたいただけなのに、どうしてそれが出来ないんだろう。そうしているうちにボクは何も考えられなくなっていた。

ボクがどこにいるのかも全然わからない。

でもこのまま流れに身を任せるのも良いかもしれない。

ただ神様がいるのであればもう一度美弥子ちゃんに会いたい——。

私の家族は、私が小さい頃に離婚した。

母に引き取られたが、しばらくして母はゴーストに殺された。

多少ながら魔法使いとしての才能があった私は、そのまま聖十字学園に入学し、その寮で一人暮らししている。

私はきつと家族というものに飢えていたのだ。

魔獣士を志したのも私だけの家族が欲しかったからだ。

でも私には魔獣士としての才能が無かった。幾度となく先生からは別の道を選ぶべきだと言われた。

そんな私のところに来てくれたのがゴマちゃんだった。

嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

うれし涙を流しながらゴマちゃんを抱いたときのことは一生忘れられない。

でも暴走するゴマちゃんを目の当たりにして、本当に私のところに来て幸せだったのかと疑問に感じた。

私に力が無いせいでゴマちゃんは落ちこぼれと言われ、迷子になったあげく、このような姿にしまった。

「ちゃんと謝らなきゃ……」

私はこの暗く明かりの届かない世界で、ゴマちゃんの名を呼んだ。

ボクは今、確かに美弥子ちゃんの声を聞いた。

信じられない———そう思った矢先、暖かい手がボクの体に触れた。

「やっと見つけた……」

目の前には瞳を潤ませた美弥子ちゃんがいた。

「ごめんね……」

美弥子ちゃんがふいにそう言った。ボクは意味がわからず、「どうして？」と聞き返した。

「辛い思いばかりさせちゃったから。私の身勝手でゴマちゃんのと傷つけたもの」

美弥子ちゃんは涙を流した。

ボクは慌てて美弥子ちゃんの言葉を否定した。

「辛いことなんて一つもないよ！ボクは美弥子ちゃんといてとつても楽しいんだよ。だから美弥子ちゃんにずっと会いたかったんだ……」

「……！！」

美弥子ちゃんはボクを抱きしめた。

初めて出会ったときと同じくらい強く。

「やっぱり私ってダメだね。ちっともゴマちゃんの気持ちわかってなかったんだね」

「ボクは美弥子ちゃんとずっと一緒にいたいんだ。美弥子ちゃんのこと、ボクが護るから」

「私もゴマちゃんと居たい。またこんなことにならないように、私もつとがんばるから……強くなるから！」

ボクたちは約束をした。

ボクの意識はだんだん薄れて、最後は何も見えなくなつた。それでも美弥子ちゃんのぬくもりはしっかり感じた。

第二章 家族であること？

ゴマちゃんの体はみるみる小さくなり、写真で見た元の姿に戻っていた。

美弥子は元に戻ったゴマちゃんを抱きかかえて涙を流した。
ゆのはそれを見て安堵の息をはいた。

「よかった……うまくいった」

緊張がとけ、ゆのはその場に座り込んだ。

「やったなあ！ゆの」

神威がゆのに近づいて頭をくしゃくしゃに撫でた。

「やつやめてくださいよお」

口では嫌がっているが表情はそう言っていないかった。

「本当によくやったな。そうそう出来る事じゃない」

夢幻もゆのに近づきそう言った。

「やはり俺たちのギルドマスターはゆのだな」

「えっ！！？」

「奇遇だな。俺も夢幻と同じこと思ったよ」

「えええ！？」

勝手に納得し、飛躍する話にゆのは当然慌てた。

「私なんかダメダメですよっ！泣き虫だし、弱いし、頭悪いし……」
あたふたとするゆのを見て神威は声を出して笑った。

「ゆのにはゆのにしか無いものがあるんだよ。そのゆのにしか無いものが人を率いるには大事なものなんだよ」

「私にしか無いもの？」

自分に劣等感を抱いているゆのには、神威が言うそれがなんなのかわからなかった。

「俺たちは今を護ることで必死なんだ。だから力で押さえつけることばかり考える。言うなれば、俺たちは後ろ向きなんだ。だがゆのが視ているのは未来。誰かのことを思い、その誰かの未来を護りた

いと願う。そしてその願いを実現させる。これは誰にでも出来る事じゃない」

神威は夢幻の言葉に頷き、付け加えるように言った。
「後ろ向きなリーダーでは前は進めないだろ？未来を見据えているリーダーの存在がそのチームを強くする。願いがゆのを強くしたようにね」

ゆのは自分がそう思われていることに驚いた。
自分のせいで失われた命もあつたし、これからもそうなることだつてある。

ゆえにゆのは自分を責め、自分が居なければと思つていた。
その思い込みはマリアとの一件でさらに強くなり、神威や夢幻、そして周りの人からも疎まれていたのではないかと思つていた。
だから神威や夢幻の言葉が意外で、救いにもなつた。
自分の存在価値を二人は見出してくれたのだから。

「私……私……」
嬉しかった。

二人はいつも投げかけて欲しい言葉をくれる。
その優しさにゆのは涙を我慢できなかった。

「おいおい、別に泣かなくても。無理やりやれって言ってるわけじゃないしさ」

ゆのは首を振って、笑顔を向けた。

「違うんです。なんか嬉しくて……」

ゆのは涙を拭ってえへへと笑った。

「私、頑張ってみます。私のせいで傷つく人がいるなら、その人のために頑張りたいんです。もう一人でふさぎ込むのはやめです」
「そうだな。お前になら出来るさ」

夢幻はゴマちゃんを抱きしめ、幸せそうにする美弥子を見て言った。
「た。」

ゆのになら、辛き苦しむ人を救える。そう夢幻は思つた。

第二章 エピローグ

ゆのは自分のギルドカードをまじまじと見つめていた。

ギルド情報に刻まれたマスターの名前。

昨日、美弥子たちを送った後、ゆのはマリアにマスターをする意志を伝えた。

その時、マリアはこう言っていた。

『過去にあった辛いことも、これから先にある辛いことも、必ず無駄にはなりません。ユノさんが乗り越える意志を持てば、きっと良い方向に向くはずです。そういう意味では、ユノさんがマスターを名乗り出たのは大きな一歩になると思いますよ』

今思えば、マリアはゆのの感じていた不安を見抜いていたのかもしれない。

「ゆのちゃんっ」

「あ、ミヤちゃん！」

晴れ晴れとした表情の美弥子がそこにはいた。

「昨日はありがとう。ゆのちゃんのおかげでゴマちゃんと心を通わせることができたよ」

「本当に良かったよっ。ゴマちゃんも大した怪我じゃ無かったみたいだし」

ゴマちゃんは一応大事をとって専門の病院で検査を受けている。美弥子はこれから迎えに行くらしい。

「ゴマちゃんはまだ大切な家族だから。誰のせいとか、自分じゃダメなんだとか、独り善がりな考えはもうやめるの。だって家族にそんな風に思っのって変でしょ？」

「うん、そうだよな」

家族を失う悲しみは痛いほどわかる。同じ境遇にあるからこそ。

だから大切なモノを手に入れた喜びもよく理解できた。
(私も独りだった。でも今は大切な人たちがいるから)

ゆのと美弥子はこのあと少し話をして別れた。
そしてゆのはいつもの場所に向かった。

ゆのは屋上を前に少し駆け足になった。

早く二人に会いたいと思うと自然とそうなってしまうのだ。
屋上につくとすぐに二人の姿が目に入った。

「神威さんっ、夢幻さんっ！」

名を呼ばれた二人はほぼ同時に振り向いた。

「お、やっときたか」

「結槻がいないと、どうも締まらないからな」

そうやって迎えてくれる二人にゆのは胸が熱くなった。

そして――。

「えいつ」

ゆのは神威と夢幻の間に入り込み、それぞれの腕を抱き寄せ、自分
分に密着させた。

「お、おいっ!？」

「いきなりどうした、結槻？」

ゆのは二人に微笑むと、こう言った。

「これからよろしくお願いしますねっ ♪」

サイドエピソード 野に咲く花？

聖十字学園は東京湾を埋め立てて作られた土地の中央に建てられている。

現在東京は新東京と名を変え、23区という区分けを無くしている。

聖十字学園が存在する学園区域。人々が住む住宅区域。娯楽の集まる歓楽区域。大別するとこの三区域に分けられるが、この三区域にも細かく分かれた区域が存在する。

新東京にある学園は聖十字学園しか無く、魔法使いでない人間は他県の学校に通っている。

まさに新東京は魔法使いのための街といっても過言ではない。

夜神夢幻は住宅区域にある自分の住むアパートを目指していた。

「疲れたな……」

暗くなった空を見上げながら、今日あったことを振り返り笑みを浮かべた。

（俺がゴースト狩り以外で疲れるなんてな）

一心不乱にゴーストを狩り続けていた自分が遠い日のようにすら思える。

夢幻はバイクのとめてある駐車場に入った。

そしてそこであまりにも不自然なモノを目にした。

（なんだ？）

そこにはうずくまって泣いている女の子がいた。見た目から大体7、8歳くらいだと推測できた。

「どうしたんだ？」

「！！？」

女の子は急に声をかけられたせいか、驚きの表情で顔を染めて固まった。

「……迷子か？」

「ワタシね……うつ」

女の子はまた泣き出してしまった。

夢幻はヤレヤレと首を振り、女の子が泣きやむのを待った。

「気がついたらこのへんに居て、どこ行ったらいいかもわからなくて……寂しくなっちゃって……」

（また迷子騒ぎか？まあ今回はさすがに聖十字のコレ系専門に任せるか）

これ以上面倒なことに巻き込まれるのは御免だった。

だから夢幻はとりあえず話だけ聞いておいて——という姿勢をとることにした。

「ところで名前は？」

「ワタシはユイって言うんだ。ママがつけてくれたんだよ！」

自慢の名前なのか、自信満々に胸を張って名乗った。

「ユイ……？はは、まったく……」

「どうしたの？」

まったく本当に何があるかわからないものだ。縁とはこのようにしてつながっていくのかもしれない。

「いやな、手のかかる知り合いと名前が似ていたもんでな。よし、ユイに付きやってやる」

ユイは目をパチクリとさせていた。

夢幻は今の自分に対し、ただ自虐的な笑みを浮かべるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888k/>

君の見るセカイ ~ Endless The World ~

2010年11月6日01時10分発行